

転生したらまたしても
猫娘だった件

炎の剣製

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

すべての生命力を使い切り天寿を全うした緑谷出久とフオウはあの世へと旅立とうとしていた。

しかし世界は、偉大な功績を残した出久をただで終わらすわけにはいかずに新たな世界に生まれ変わらせる。

謎の声とともに導かれた出久とフオウは新たな世界で産声を上げる事になる。

二人の新たな旅に幸先のあらんことを…。

『猫娘と化した緑谷出久』の続編で『転生したらスライムだった件』とのクロスオーバーです。

思いついちゃったものは仕方がないので不定期ですが更新していきます。

まず、前提として『猫娘と化した緑谷出久』を読んでくださればどうい内容か理解できますのでそちらから先をお願いします。

『猫娘と化した緑谷出久』

<https://syosetu.org/novel/153301/>

『暁』様でマルチ投稿をしていますので、もしよろしかったらそちらもよろしくお願いします。

目次

N O .	0 0 8	名付けと進化	73
N O .	0 0 7	フォウの説教	64
52			
N O .	0 0 6	牙狼族と事情聴取	42
N O .	0 0 5	ゴブリンの村とスライム	32
N O .	0 0 4	忠告と特訓	23
N O .	0 0 3	ドライアドのトレイニー	12
N O .	0 0 2	スキルと状況確認	1
N O .	0 0 1	転生	1
N O .	0 0 9	リムルの目覚めと進捗	84
N O .	0 1 0	ドワルゴンに向かう道中	97
N O .	0 1 1	外伝・ヴェルドラの観察	107
日記	1		
N O .	0 1 2	門の前での騒動	117
N O .	0 1 3	詰め所にて	128
N O .	0 1 4	鍛冶職人	139
N O .	0 1 5	エルフ達と思わぬ出会い	150

NO. 001 転生

……あの世という概念があるのなら出久とフォウはそこへと向かっているのだから。

だが、魂の半分は分割されて残滓として弟子に与えた『ワン・フォー・オール』へと流れていった。

そして、それを見届けて本来の出久とフォウの魂はというと、

『フォウ……魂も半分は弟子に流れていったしこれでもう思い残すことはないかな？』
『そうだね、イズク。でも……これでイズクのお友達からもらった個性達も無駄ではなかったって感じだね』

そう……それは遡る事、まだ学生在学中にお茶子が言い放った一言から始まった。

「デクちゃん！　もしも……もしもだよ？　最悪デクちゃんが私達よりも先を生きにくい事になるんだっいたら……私の個性をその時にデクちゃんにあげる！」

「麗日さん!?　それって！」

「わかっているの……デクちゃんは私達と一緒に同じ時間を生きて一緒に逝きたいっていう望みを持っている事は……でも！　もしもそれが果たされなかつたら私はきつと後悔する……。死んでも死にきれんよ」

お茶子は目に涙を浮かべながらそう語る。

出久はそれでもなにも答えられずにただ嬉しくて、同時に泣きたい気持ちになった。

お茶子が自分のためにここまで想ってくれている事を……。

「でもよー……それじゃどうすんだ？　おいら、個性の渡し方なんてできないぞ？」

そこで周りで聞いていたUーA一同も会話に参加してきた。

「確かに……ふがいないがオールフオーワンみたいに自由に個性を与えたり譲つたりはできないからな。そこ等辺はなにか考えがあるのかね？」 麗日君

飯田に聞かれたお茶子は頭を少し捻って「うーん、うーん」と考えてはいるのだが、なかなか発言してこない。

それで業を煮やした爆豪が吼える。

「てめ、麗日！ 考えなしにそんな発言したのかオラツ！」

「いや、待つて！ ちゃんと考えはあるんよ？ ただ、それはデクちゃんにも相談しないといけない話で……あと、もし皆もこの話に乗るなら血判状くらいは用意した方がいいくらいだから」

「血判状かよ!? また古い言い回しを知ってんな、麗日」

「血で結ばれた絆……深いな」

切島と常闇がそう発する。

確かに……血判状というのにはヤクザとか義理人情系でしかもうお目にかかれないほどに時代的に古いものなのだから。

「お茶子さん、話してください。もし緑谷さんのためになるのでしたらわたたくしは協力を惜しみませんわ！」

「やおももほどじゃないけど、ウチもその話は詳しく知りたいね」

「いいねいいね！ わつたしもー！」

「私も私も！」

「聞かせてちょうだい。お茶子ちゃん」

女子全員ももう乗り気であった。

それで問われたお茶子は一回深呼吸をしながらも、

「もしも、もしもだよ……？ 私達が無事にヒーロー稼業を全うしてヒーローを引退したらもう個性なんて無用とは言わないけど使う機会なんて減っちゃうでしょ？ おじいちゃんおばあちゃんって個性なんて使ったら体に響くのは請け合いだし……」

「そうだな」

「確かに……」

「でも、その時にデクちゃんがまだ生命力を使いきれずに今の姿のままだったら……みんな、どう思う？」

みんなにそう問いかけるお茶子。

それで全員は想像したのか苦い顔になった。

それはそうだ。

もうみんなおじいちゃんおばあちゃんの中、出久が一人だけまだ20代にもなってい

ない姿で取り残されているのだから。

「それは……嫌だな」

「うんうん。それは嫌だ。考えたくもない」

一人、また一人と嫌だ、と答える。

それを聞いてお茶子は考えていた案を言おうとする。

「だからさ……もしデクちゃんが一人取り残されてしまふんなら、私達の事を忘れないように、覚えていてほしいという想いをこめてせめて個性だけでもデクちゃんにあげようと思う……んやけど、どうかな？」

「いいと思うよ……でもさ、どうやって個性を譲渡するのか、それが問題だよ？　そこは

どうすんの、麗日？」

「うん。そこはデクちゃんの『与える』個性が日の目を浴びてくるんよね」

それを聞いていた出久が、

「与えるが、なの？」

「うん、そう……。ある意味裏技に近い行為なんだけど、私達にデクちゃんが『与える』個性を『与える』」

「ツ！　まさか！」

「そう。一時的に『与える』個性を使えるようになったらすぐに自分の個性を『与える』

と一緒にデクちゃんに丸ごと譲渡する。こうすれば受け渡しはできるでしょ？ 与えるもデクちゃんに帰ってくるし一石二鳥だよ！」

私、必死に考えたんだよ！と言わんばかりに腰に手を当てて満足げな顔をするお茶子。

しかし、それで全員は妙案だと悟る。

「ケロ。お茶子ちゃん……とてもいい案だと思うわ。それならしてやれないことはないと思うわ。みんなもそれでいいかしら？ これはもしもの案だけど、出久ちゃんにとってはあり得ない話でもないのだから……」

『さんせい！』

クラスの一団が満場一致で納得したのでこうして最悪を想定して今後を生きていく事になった。

そして出久はそんなみんなの思いやりに涙を流しながら「みんな、ありがとう……」と言ったのだった。

その話は出久と親しい冴汰や壊理ちゃんにも行き渡り、母・引子や父・久にも了承される内容だった。

………そして、出久は全員の死に目が近い時に顔を出して個性を譲ってもらい、個性は思い出の形の結晶となった。

出久とフォウはそんな事を思い出しつつ、ふととある事に気づく。

『ねえフオウ？ ちょっといいかな？』

『うん……なんとなくイズクの言いたい事はわかるかも』

『うん……なんていうか。ずっとどこかに僕達とどまつていない？』

そう、本来ならあの世にいくものだろう、さっさと進んでいくものだと思われたのだが、一向に進んだ感じがしないのだ。

なにかがおかしい。

そう感じた時だった。

【告。あなた方に生前の功績からギフトがあたえられます】

『ツ!?!』

そんな、どこからともなく聞こえてくる謎の声に出久とフオウは久方ぶりに緊張をす
るといふ体験を味わった。

【あなたが持っている個性と呼ばれるもの。まずは統廃合をしていきます】

「なんて……？」

『炎術』『爆破』『半冷半燃』『火を吹く』『ネビルレーザー』を統廃合、ユニークスキル『氷炎乱舞』に統合、獲得……成功しました」

「えっ？」

『爪の伸縮自在』『爪の硬質化』『脚力強化』『身体強化・怪力』『エンジン』『硬化』『シユガードープ』『複製腕』を統廃合、ユニークスキル『金剛怪力』に統合、獲得……成功しました」

「まっ……」

『叫ぶ事による衝撃波』『イヤホンジャック』『ちよつとした物を引き付ける』を統廃合、ユニークスキル『絶対衝撃』に統合、獲得……成功しました」

「ええ……？」

『変化』『蛙』『尻尾』『テープ』『黒影』『透明化』『もぎもぎ』を統廃合、ユニークスキル『完全擬態』に統合、獲得……成功しました」

「ちよっ!？」

『猫の言葉を理解できる』『生き物ボイス』を統廃合し、エクストラスキル『全言語理解&服従』を獲得……成功しました」

「まっ!？」

『生命力を奪う』『創造』『無重力』『酸』『帯電』『人を巻き戻す』『水流放出』を統廃合し、ユニークスキル『仙術』を獲得……成功しました」

「まって!!」

【個体名：フオウと『与える』『オートヒール』を生前の功績から融合しユニークスキル『治癒者ヘイヤスモノ』を獲得……成功しました】

「イズク!!」

「フオウ!!?」

【『五感強化』を進化……ユニークスキル『超感覚』に進化……成功しました】

【『許容量キャパ限界を無くす』を進化……ユニークスキル『無限成長』に進化……成功しました】

「もう、なんなの!?!」

【以上を持ちまして統廃合と進化が完了しました。そして新たにユニークスキル『妖術』を獲得……成功しました】

「もう、どうにでもして……」

【告。すべてが終了しました。それでは新しい世界でよい旅を……】

そして出久の意識は問答無用で薄れていくのであった……。

そして次に出久が目を開けた時にはどこかの森の中であつた。

こうして、出久とフオウの新たな旅が始まろうとしていた。

NO. 002 スキルと状況確認

謎の声によって持っているすべての個性を勝手に統廃合されてしまった出久は意識を失った後に、再び目を覚ますとどこかの森の地面に横たわっていた。

「あ、れ……？ 僕は確か……」

しばらく意識が朦朧としている出久であったが、次第に先ほどの記憶がぼんやりとだ
が思い出されてきていて、

「そうだ！ フォウ!? フォウ、いる!?!」

「うーん……なんか頭がズキズキする感じだよ、イズク〜」

「フォウ……ッ！ よかった……」

フォウの意識が確認できて一応はホッとする出久。

もしフォウがいなくなっていたら出久の精神は危うかっただろう。

それくらいには長年一緒に生活してきたのだ。

二人の絆をなめてはいけない。

「それでなんだけど、フォウ。状況確認しようか」

【そだね、イズク。……………とところでイズク、なんかちっこくなくてない?】

「は? え?」

それで出久は自分の手を見てみた。

見た感じ小学生という感じくらしいの大きさの手のひら。

胸は当然なく感覚的にかなり小さいことが実感できている出久は、それで思わず、

「僕、子供になっちゃってるの!」

【イズク可愛いね。初めて会った時を思い出すよー。でも、今は猫娘の姿なんだけどね】

「そこらへんは生前と変わりなしてところかな……………? でも、身体が小さいとこれか

らいろいろと大変そだね……………」

【そだねー】

少し深刻な顔になっていいる出久とは正反対になぜかフォウはとても軽い感じで応答

しているために出久は少し調子がくるっていた。

「なんか、フォウは平然としているね……………」

【うん。なんていうか私、スキル化しちゃったみたいで今はイズクのすべてが把握できているからそんなに心配はしていないんだよね】

「スキル化って……さつき謎の声の人が言っていた統廃合って奴？」

「うん。今の私は『治癒者ヘイヤスモノ』ってスキル名らしくてどこからか勝手に知らない知識も流れてくるんだよねー。だから少し頭を空っぽにする気分になっていないとすぐに目を回しちゃうんだー」

さきほどからの軽いスタンスもフオウナりの気遣いという事になる。

それで出久はどうか納得しつつ、

「そ、そうなの……。ま、まあいつか。それでだけど、僕達は所謂転生したって事で正解なのかな？」

「多分そう。服も少し質素だけど着させてくれていてよかったね。真っ裸のまま放り出されたら大変だったよー」

「そうだね……服は重要だ」

なくはないだろうが今の出久の姿を見て欲情してしまう変態がいなくても限らない。だから服はせめてもの情けなのだろう。

「それと個性はどうなったの……？ さつきはかなり急な展開だったからあんまり実感が無いんだけど」

「うん。なんか使えなくなっているものとか、そもそも統廃合で無くなっちゃったものも何個かあるけど、それでも使おうと思えば使えるよ。なんせイズクはかつて私が失っ

てしまった『妖術』のスキルを持っているからね」

「『妖術』って、確かいろんな力を開発できる能力だよな？」

「うん。大体はそう。まあこの世界ではなんか『魔素』っていうものからできているみた

いなんだけど……あんまし元の世界と違いはないから流して大丈夫だよ」

「フオウ……なんかフランクな性格になったよね」

「そうだねー」

もしいまフオウの顔が見れるとしたらとてもお花畑が咲いてそうな笑顔を浮かべている事だろう。

出久の脳内にはそんなフオウの顔（猫顔？）が浮かんだとかなんとか……。

「それじゃちゃつちゃと今あるスキルを確認していこつかー」

「そうだね」

それでフオウは出久にも分かるように脳内のモニターみたいな感じに出久の脳に直接イメージを浮かび上げらせる。

—— ユニークスキル 『金剛怪力』

—— ユニークスキル 『絶対衝撃』

—— ユニークスキル 『完全擬態』

—— エクストラスキル 『全言語理解&服従』

—— ユニークスキル 『仙術』

—— ユニークスキル 『治癒者へイヤスモノ』

—— ユニークスキル 『超感覚』

—— ユニークスキル 『無限成長』

—— ユニークスキル 『妖術』

【この九つのスキルがおおまかに統廃合されて新たに生まれたスキルだね。よかったね、イズク】

「よかったって……なんで？　むしろ無くなっちゃったものとかもあるんでしょ？」

【うん。でも、結局貰っても生涯使わなかった個性ばかりだから少しは使えるように進化していて嬉しいでしょ？】

「それもそうだけど……みんななどの思い出の絆でもあったから……」

【だいじょうぶ！　元の個性のデータも私のライブラリーに保存してあるからいつで

も閲覧できるよー!」

「ほんと……?それなら、まあ……いいかな」

「よし。イズクも納得したところで能力の確認といこつか。

まず一番上のスキル『氷炎乱舞』だけど、これは炎系の個性と轟の小僧の氷の力が同時に扱える力だね」

「いきなり轟くんに対して辛辣!?!」

「まあまあ。そして主に使用する体の場所は両手だね。左手で氷。右手で炎。一緒だね」

「うん……」

「それに両手で爆破もできるし、レーザーも手のひらからどっちかの属性攻撃が放てるね。火を吹くは統廃合で使えなくなっちゃったかな。私的にもイズクが口から火を出す絵面は想像しにくいんだよねー」

「お父さん……」

思わず父の事を思い出して密かに涙を浮かべる出久。

「ちなみにスキル化に伴ってこのスキルも含めてデメリットがほぼなくなったのが嬉しみだね」

「デメリットがなくなったの? それは確かに嬉しいかも……」

「うん。次は『金剛怪力』。これは身体強化・怪力の超強化版と言ってもいいかな。

やろうと思えばワン・フォー・オールみたいな使い方もできるよ。爪も出せるし、以前よりより硬くできるし」

「それは嬉しいかな。フルカウルがまた使えるのは役立つよ」

「そだねー。お次は『絶対衝撃』。これは単純にキャッツシャウトがより強化された感じだけど、叫ぶことで対象を引き寄せて固定化して衝撃を与え続ける事も可能だね。なぶり殺し♪」

「怖いよ、フオウ……」

まだフオウのテンションについていけない出久は少しフオウに恐怖を感じていた。

まあ今まで抑圧されていた面が少なからず表に出てきているのだろう。

それもある意味良い事だ。

「気を取り直して、次は『完全擬態』。これも以前の様に姿を大猫から中猫、子猫に変えられる力があるけど、大事なのは統合された個性達が顔を出してきているね。

特に梅雨ちゃんの個性『蛙』は文字通り蛙になれるし、透ちちゃんの『透明化』を使用すると姿どころか気配、魔力すら隠せる力を秘めているね。

『テープ』も肘を変化させて使えるよ。

でも、代わりに『尻尾』『黒影』『もぎもぎ』はいいとこだけ受け取って使えなくなっ

たね。残念だけど……」

「そっかー……」

【そして『全言語理解&服従』。以前は猫だけにしか使えなかったけど、今は全動物とこの世界だと魔物にも作用するかな。服従させる力も強くなってるし。

あと言葉通りこの世界の言語を読みも書きも理解できるよ】

「それはいいね。魔物とかとも穏便に事を済ませたいし……」

【わからないよー？言葉が分かる分、余計話がこじれてしまうのはどこの世界でも変わらないから】

「確かに……気を付けて使わないとね」

それで気を付けて使っていていこうと誓う出久であった。

【それではお待ちかね！ 私こと『治癒者ヘイヤスモノ』の定番です！

なんと以前は生命力を使用しないと回復できなかった傷とかが魔素を消費するだけでお手軽に治癒できるようになりましたー！

それにプラスしてもう分かっていると思うけど私の緻密なサポートもあるから魔素量にもよるけど死んでなければ欠損した部分も復元可能かも！

「すごいよ、フォウー！」

【イズクに褒められたー！】

またしても花が咲き誇っているかのようなりアクションをするフオウであった。

【あとはねー、『超感覚』に『無限成長』だけだね。超感覚は第六感が使用可能だし『無限成長』は魔素量も使えば使う程余計が増えていくね。地道だけど最強を目指せる能力だね。魔導書とかも読めば覚えられるし】

「なるほど……」

【そして最後になるけど『仙術』、なんだけど……】

そこで急に歯切れが悪くなるフオウ。

出久はどうしたのだろうかとう心配になっていた。

【これに関しては私的に言えば未知数だね……】

「未知数……」

【統廃合された個性柄、自然界の力を自在に操れるイメージで間違いないけど、下手したら環境そのものを塗り替えてしまうかもしれない大それた力かも……】

統廃合された個性が『生命力を奪う』『創造』『無重力』『酸』『帯電』『人を巻き戻す』『水流放出』だけど、ここから想像できるものを言うね。

たとえば酸の雨を降らしたり雷を落したり……祈ればなんでも創造しちゃうし、他人に対して若返りも可能で、空も自在に飛べたり、自在にものを押し潰したり……水流の流れを変えて洪水をおこしたり、自然界から魔素エネルギーを奪うなんてことも可能

かもね。

だからなにが出来るかっていうと、なんでもできちゃうし恐ろしいスキルだから使いどころを考えてね？」

「確かに怖いスキルだね。わかったよ、フオウ」

これでスキルの説明は大体終了した。

あとはというと、

「それじゃあとは実際にこの森を歩いて行つて誰かと遭遇するのを待つか、地道な作業をしていこつか。なんか本格的にRPGな感じになつてきたね！」

「実際に行動するのは僕だけだね……はあ、せめて身体が大きかったらよかったのにな……」

「まあまあ。今のイズクも可愛いからいいじゃない♪ そのうち成長するわよ。手っ取り早く行きたいなら『完全擬態』で成長させちやえばいい事だし。今なら赤ちゃんからおばあちゃんまで自由に姿を変えられるから便利だよ？」

「うん。まあこれが今の僕の本来の姿みたいだからこれでなんとかやりくりしていくよ」

「やっぱりイズクって堅実的よね」

「まあね。とにかく歩を進めていこうか。道すがらスキルを実際に確認をしていつでも

いいしね」

【そうそう。なんの縛りもないんだからコツコツいきましょ！使えばその分魔素も増えていくわけだし一石二鳥だね♪】

「そうだね」

フオウ先生のスキル講座も終わって出久は森の中を当てもなく進んでいくのであった。

「（突然あの場所に現れたと思っただけ……いえ、おそらく違いますね。それにあの強力な魔素量に聖なる気配……聖獣？ 近くコンタクトをとった方がよさそうですね……）」

出久の姿を出現時から見ていたとある人物がそう考えていたのであった。

NO. 003 ドライアドのトレイニー

出久はとりあえずどこかも分からない道を進んでいきながらもとあることをフオウに忠告されていた。

「イズク、とりあえずなんだけど体から漏れ出ている妖気オーラを抑えない？ そうでもしないところら辺に住み着いている魔物とかが恐れてしまつて顔を出してこないよ？」

「そういうものなの？ わかつた。どうすればいい？」

「そうだね。ちよつと自分の体から漏れ出ているオーラ……個性に言い換えれば未使用時状態にしておく感じかな」

「やってみる」

それで出久は抑えるイメージをしていると、フオウがなにかを感じたのか、

「あ、イズク。なんか新たにエクストラスキル『魔力感知』を覚えたみたい」

「……そんな簡単にスキルつて増える物なの？」

「多分だけ……イズクが無意識的に『妖術』を使用して新たに覚えたんだと思う」

「なるほど……」

【うん。おかげで大体の力は対外的には感じられなくなつたかな。この世界の普通の魔素量の基準がまだ分からないからしようがないけど……イズク、オールフオーワンみたいな感じだったよ。オーラが……】

「うっ……嫌な例えはやめてよ、フオウ」

【まあまあ。それと、今後からは私と話す際は心の声で話すといいと思う。他から見たら独り言を言っているちよつと痛い子だから】

それを聞いて出久はひどく感銘と同時にシヨックを受けた。

確かにそうである。

誰かに聞かれているかもしれない中でさきほどは結構一人でブツブツ言っていたよ
うに見えていただろう。

それで少しばかり羞恥に悩まされていたのだが気を取り直して、

『そ、それじゃ……こんな感じでもいいかな?』

【うん。いいと思う。これで内緒ごとは二人だけで話せるね】

『そうだね』

フオウと心の中で会話する術を得た出久はそれからどうしようかという話になつて、
「とりあえず、思ったんだけど……妖術って便利だね。仙術がまだ未知数だからこれだ

けでもありがたいかも……」

【そうだね】

「でも……」

そこで出久は一回地面に体育座りになって座る。

そして回想するは残してきた子孫たちや弟子の存在。

「あの子たち、元気にしているかな……。僕の個性をいくつか継いで身に着けた子達は
まだ生きているから大丈夫だけど、同じく猫娘になったのには笑えないけどね」

【可愛かったからいいと思うよ。私も我が子の様に思ってたし】

「うん。そっちはあまり問題ないと思う。出来る事はもうしてきたはずだし。」

問題なのは弟子の方だねー。ワンフオーオールを引き継がせたのはいいけど、これ
から発現していく個性達に身体が追い付いて行けるか心配だよ。

僕も先代達の個性が出た時は結構苦労したのに、そこにプラスして20個以上の異なる
個性がぶわつと出てくるんだから……」

【イズクみたいに統廃合されて最適化されているわけでもないからね。たぶんただの人
間の平均寿命だと全部会得するのは困難だと思うなー。廃人一直線……?】

「そんなことはないと思うけど、万が一耐えられなくなつてワンフオーオールを放棄し
ていたらと思うと怖いよね……」

【大丈夫だよ。イズクが選んだ子でしょ？　きっと立派に成長してくれているよ】
「そう願うばかりだね……」

そんな事を話していた出久とフオウ。

実際、弟子は出久が逝ったあとにきつそく猫娘に変化してしまつて色々と挫折しそふになつてゐるのはここは言わぬが花である。

きつと、半分ワンフオーオールに宿つた出久の魂たちがなんとかしてくれるだろう。そう願いたい。

そんな時にその場に一陣の風が巻き起こつた。

「わっ？　なに!？」

【イズク！　なにか来るよ!】

——— そのお話、わたくしにもお聞かせくださいませんか？

その言葉とともに風が止むとそこには緑の髪をしたどこか神秘性を伴った感じの女性^レが立っていた。

その突然の登場に出久は一瞬言葉が止まってしまっていた。

女性^レはニコリと笑みを浮かべながらも、その瞳は真剣そのものであった。

「あ、あなたは……」

「わたくしの名はトレイニー。このジユラの大森林の管理者である樹妖精^ドです」

「ドライアド!? それってファンタジー世界では結構有名な……」

「あら。わたくしの存在はご存じなのですね。それよりお聞かせくださいませか? 名も分からない聖獣様。あなたはどのような理由を持ちましてこのジユラの森に出現したのですか?」

「せ、聖獣……? 僕が?」

「あら? 自覚はないのですか? あなた様からかなりの聖なる気配を感じられるのですが」

「そうなんですか? フォウ、わかる?」

「そうだねー。多分生前の功績なんかでそんなものを纏っているのかもねー。イズク、かなりの人数救ってきたわけだし」

それで出久も自覚する。

万単位での人の命を救ってきたわけだからそのくらい当然なのかな、と……。

「その、フオウさんというのとはどなたですか？　この森に現れた時から独り言のように会話を成されていますがなにかのスキルなのでしょうか？」

「えっと、はい。僕の昔からの相棒であり、今はスキルの一つで『治癒者<イヤスモノ>』というものになったらしいんです。

それと先ほどの突然現れたというのは、信じられない話だとは思いますが、多分僕がこの世界に転生してきた瞬間だと思うんです」

それを聞いたトレイニーは驚愕の声を上げる。

「まあ！　あなたは転生者だったのですか」

「あれ？　意外な反応……もしかして僕以外にも転生者って結構いるんですか？」

「まあいるといえбайると思います。わたくしは会った事はありませんが……他にも異世界から渡ってくる異世界人などの存在も確認できていますね」

「そうなんですか……」

「それで、あなたの事はなんとお呼びすればいいですか？　転生してきたばかりなのでしたらまだこの世界での名はないのでしょうか？」

「名前……？　生前の名前でしたら『イズク』がありますけど……この世界って名前って結構重要なんですか？」

「はい。この世界は人間は普通に名付けられていますが、魔物などはほとんどは名前を持ち合わせていません。そしてもし名前があるのでしたらその魔物はネームドと呼ばれ、誰かの眷属に力とともに名付けられるものが多いです」

「そうなんですか……」

「はい。しかも名付けは魔素を大量に消費するためにはほとんどの場合は力あるものしかできない行為なのです」

そのトレイニーの説明を聞いて出久は納得しつつも、思った。

なぜ初対面の自身にここまで丁寧の説明してくれるのかと。

「あの、トレイニーさんはなんで僕にそこまで丁寧に説明してくれるんですか……?」

「ふふふ……なんででしょうね。ですがあなたの聖なる気配も関連してか悪人ではないとわたくしの勤が告げているのです」

「はあ……それはどうもありがとうございます」

【よかったね、イズク】

穏やかな笑みを浮かべているトレイニー。

とりあえずトレイニーからは良い評価を貰っている事に出久は安堵しつつ、するとトレイニーがある質問をしてきた。

「それですが、もしよろしければ前の世界であなたは何をしていたのかを聞かせても

らってもよろしいでしょうか？ その聖なる気配を出せる意味もそれで分かるかもと思おうのです」

「いいですけど……ちよつとフオウと相談させてください」

「わかりました。しばし待ちますね」

トレイニーからそう言葉が返ってきたので、出久は心の声でフオウと会話をする。

『それでフオウ。どうする？ 僕としてはトレイニーさんは信用できると経験上分かるんだけど』

「イズクがそう感じたなら私が意見する事なんてないよ。それにこの世界に来て初めて出会う人（？）だしなにかと情報も必要となってくるから、私としても話すのは賛成かな」

『そっか。うん……それじゃ掻い摘んで話すね』

それで出久は決心しつつ、トレイニーに向き合って、

「それじゃ話しますね。僕の生前してきたことを……」

「はい。ありがとうございます」

「僕は前の世界ではヒーローをやっていました」

「ヒーロー……ですか？」

それで出久は説明をしていく。

個性社会となつて一回荒廃した世界で、それでも立ち上がつて頑張つてきた前の世界の事を。

そして自身は色々な人の助けもあつてたくさんの人の命を救つてきたことなど……。

掻い摘んで簡単に説明が終わると、トレイニーはどこか感動しつつ、

「なるほど……イズク様のその聖なる気配の原因は過去の功績だったのですね」

「多分ですが……なにぶんまだ転生してきてそんなに経つていないんでフオウとともにまだこの世界がどんな世界か知りません。

それに多分ですがもう前の世界の既成概念とかはこの世界では通用しないと思うんです……」

「そうですね。この世界にはヒーローを自ら名乗る人は恐らくいないでしょう。勇者や英雄、魔王などはいませんが」

「ですよねって……え？」

トレイニーからさらつとだが出たとんでもない単語に出久は思わず目を丸くさせる。

【やっぱりRPGの世界だね……】

フオウの心から思つて呟いた感想がすべてを物語つていた。

NO. 004 忠告と特訓

それからトレイニーに案内されて結構神聖な場所へとやってきた出久はというと、

「おそらくですが、今のイズク様がジユラの森を普通に歩くのは魔物たちにとって悪影響になるかと思われるのです」

「どうしてですか？ 魔力感知でもうあんまりオーラも漏れ出ていないとは思うんですけど……」

「いえ、まだ転生してきたのに一日も経過していません。ですからイズク様はまだこの世界の常識を知りません。わたくしが懸念をしているのは生前は人々を救い続けてきたイズク様が、弱者は淘汰され強者が睨みを利かせている魔物社会に適応できるかの心配をしているのです……一応聞きますが人を殺した経験などはないのでしょうか？」

「うっ……はい。救いはしても人殺しをしないのはヒーローの条件でした。さもないとすぐにヴィランになってしまいますから」

そう、出久はその事を前の世界で嫌という程実感している。

ヒーローは人殺しを禁忌とされていてあくまで裁くのは警察の組織であり、半面ヴィランはそんなヒーローの常識を逆手にとって時には「ヒーローが人殺しをするのか?」と脅してそんな自分らは平然と人を陥れて殺す……。

そのくらいに世界は混沌に満ちていたのだ。

個性が始める前の世界をお話で聞いたことがあるが、それでも人々は欲望を抑えてなんとか日本は比較的事件が少ない国だと言われていた。

だが、個性の出現とともに人々を縛る枷は壊れてしまい欲望が満ち溢れる世になった。

その時代を象徴するのはやはりオールフォーワン。

「ですので酷な話ですが信頼できる居場所ができるまではイズク様は森を出歩かないほうがよろしいと思うのです」

「お話はわかりました。ですけど、それだと僕はこれからどうすればいいんですか?」

その信頼できる人が来るまで待つのは別に構いません。でも、殻の中に籠るのもなにか違う気がするんです」

「わかっています。ですからまずはイズク様はご自身のスキルをしっかりと会得して、いつか来るであろう信頼できるお方が現れるまでに覚悟を決めておいてほしいのです」
「覚悟……」

覚悟とは……？

「それって、まさか……」

「はい。イズク様にとつてとても辛いお話ですが、殺し殺される覚悟です。この世界はひとたび争いが起きればそこに法の秩序など存在しません。

あるのは勝てば正義、敗者は淘汰される……そしてジユラの大森林の周辺には様々な国がありますが、けっして一枚岩ではなく常に睨みを利かせているようなものです。

幸いジユラの大森林はいまは暴風竜ヴェルドラ様の加護がありますからかろうじて争いは起きていませんから大きな戦いに巻き込まれることはないでしょう。

それでも弱い魔物は狩りの対象にされることはよくあることです」

「……………」

出久は無言で決して誇張でも何でもないトレイニーの話をじっくりと聞いていた。

今後の役に少しでも立たせられるように。

「……………」ここまで言えばもうイズク様も分かると思いますが、もうイズク様の元の世界の常識などこの世界では通用しません。当然話し合えば和解できることもあるでしょうが魔物達はその簡単に話し合いに応じてくれることも稀でしょう。

イズク様のスキルで服従させればなんとかなるでしょうが、まずは腰を据えてこの世

界を知る事から始めてみたらいかがでしょうか。幸いわたくしどももお力添えできま
すので、時間をかけて決心がつきましたらここをでて魔物達と共存していくのもありだ
と思います」

「そうです、ね……」

【イズクー、今は耐えの姿勢だね】

なんとか納得していた出久とフオウであつたが、それはそれとしてトレイニーは出久
に対してここまで過保護になつているのには理由があつた。

トレイニーのかつての主に似て聖なる気配を持つている出久の事をどうしても放つ
ておけず、そしてその聖なる光を今はまだ濁す行為はしたくないというのが本心でも
あつたからだ。

そんなトレイニーの思惑通り、出久はしばらくこの場でスキルの修練や世界について
学ぶことに専念する事になつた。

出久の力は下手したらどこかの国に目を付けられてしまうかもしれないくらいに貴
重で強力だ。

だからまずは自覚してもらわないとトレイニーとしても出久をただで野放しにはで
きないという事であつた。

——それから出久の修行が始まった。

スキル『仙術』を使い、雷雲を発生させて自らに落とすというある意味荒業。

普通ならショック死ものだが、上鳴の個性である『帯電』も能力はしっかりと残っているためにまずは貯蔵量を増やすという試みをしていた。

幸い『無限成長』で電気の蓄積量はどんどん増えていくので「ウエイイ」という事にはならない。

さらには使えば使う程魔素量もどんどん増えていくために本当の意味で一石二鳥を実現している。

上鳴の時の様に大容量バッテリーを使わずとも自家発電できるようになった出久はあらゆる意味で上鳴を上回っていた。

「イズクー。なんかスキル『帯電耐性』が身に着いたよ」

「まあそりゃそうだよね……」

「他にも『氷雪耐性』に『炎熱耐性』、『水耐性』も身に着いたし、あとは風耐性とかも覚

えたらいいかもねー。『妖術』で増やす？」

「いや、今はその場その場で増やしていこうと思う。やつぱり実戦で体験した事を教訓としてすみやかに対処した方が身に着くのが早くなると思うし」

【確かにねー】

出久は生前からの特訓の成果で個性『猫又』に関連するスキルに関しては大体すぐさまコントロールできる。

しかし、みんなからもらった個性の操作に関しては絆としてもらっただけで訓練などはしていないために、今から習得していくスタイルなのだ。

特に今は炎と氷のレーザーに関して考え込んでいる。

うまくすれば二つのレーザーを集束して大技を放つことも可能かもしれないからだ。

技が完成して命名するとすれば『ビッグオン・アタック』だろうか……？

そしてさらにここに帯電している電気を合わせれば炎・氷・雷の三つの属性が合わさったレーザーが放てるかもしれない。

他にも『妖術』を使えばやりようはいくらでもあるので出久としては生前に書いていたヒーローノートの記憶をフォウから脳内に再現してもらって訓練法などを学んでいた。

……そんな、出久の訓練している姿を遠目で見ていたトレイニーはというと、
「まさか……イズク様はそのうち魔王にも匹敵するほどの魔素量と強さを獲得するの
ではないでしょうか……？」

と、成長著しい出久に対してある意味で畏怖の念を抱いていた。

同時に、

「だからこそ、わたくしがしっかりと正しい道へと先導して差し上げないと……ッ！」
と、この世界の知識を教える際にはしっかりとしないと思っていた。

ただでさえ出久は真面目で勉強熱心な性格だから余計にトレイニーの教育者としての
顔が出ているとの事。

……さらに付け加えると、出久の身体的成長は推定10歳くらいから全然伸びていな
いために小さい子供を育てている感じみたいで母性を刺激されるとかなんとか……。

ただ、トレイニーは出久の話を聞いているはずだから忘れていると思うのだが、出久
は生前に子を産み親になって育てるなどしているために……子育て経験に関してはト
レイニーよりあつたりなかつたりするのだ。

そこはもう本当に言わぬが花である。

……………それから出久は特訓を半年以上続けていたある時であった。

「ッ!？」

突然トレイニーの顔が驚愕に染められていた。

「トレイニーさん!?! どうしましたか!!」

「あ、その……暴風竜ヴェルドラ様の気配が消えてしまったのです……」

「ヴェルドラ様……世界に四種しかない魔竜で今は洞窟に封印されているって話の……」

「はい。そのはずなのですが……なにかが起きたのかもしれませんが。イズク様、申し訳ありませんが教育に関してはここまですりなりました。ヴェルドラ様という抑止力が消えたことによりジユラの大森林に生息する魔物達は動揺し、領地争いが起きるかもしれません。さらには……」

「諸外国や魔王達も動き出すかもしれない、と……」

「はい。よく学んでいますね。その通りです。ですからイズク様には申し訳ないのですがスキルの訓練もだいたい済んだでしょうし、視察の意味も込めて魔物の村などを見て周ってほしいのです。なにことも経験ですね」

「わかりました」

「あ、ですがあまり大きな行動はなさらない様に……。目立てばそれだけ敵を生むことになるから」

「はい」

「そして、もしかしたらこのヴェルドラ様の消失はなんらかの力が働いていると思うのです。わたくしも姉妹達を集めて情報を集めますので、イズク様もくれぐれもお気を付けてください」

「はい。トレイニーさん、今までお指導ありがとうございました」

「そんな……。勤勉なイズク様だったからスムーズにできたのです。わたくしも貴重な経験が出来ましたのでお互いさまという事にしておきましょう」

「そうですね」

それで出久は神聖な森からでることになり、トレイニーに見送られながらもこれからの行動について考えるのであった。

【それじゃイズク！ はりきっていこう！】

「そうだね、フオウ」

……そして、出久はのちほどにとあるスライムと出会う運命にある。

その結果、どう変化するかはまだ誰も分からない。

NO. 005 ゴブリンの村とスライム

「(ふむ。でも、魔物の村を搜索と言つてもまず村がどこにあるのわからないだよね)」
出久はこの広大なジユラの森の中をひたすら歩きまわっていた。

道中でなぜか襲ってくるトカゲやら蛇やらクモやらの巨大なモンスターがいたが穏便に『全言語理解&服従』を使い、怯えさせて退散してもらった。

オーラを駄々洩れにさせれば近寄つてこないだろうが、トレイニーの言いつけであまり力を出しすぎないようにと言われているので出久は素直にその約束を守っていた。

しばらくするとなにやら貧相ではあるが小さい村のようなものが見えてきた。

そこではなにやらゴブリンらしき者たちが一か所に集まつて誰かにお辞儀をしている姿が見えた。

『ねえフォウ。なんかあのゴブリン達、見間違いでなければスライムにお辞儀してない?』

『そうだね、イズク。少し魔力の気配を解いて話しかけてみる?』

フォウの提案で出久は魔力を少しだけ滲みださせると途端にゴブリン達はこっちへ

と振り向いてきた。

「グガッ！ 何者だ!!」

「まさかも牙狼族が来たのか!」

と、もう大騒ぎになっていた。

「なんかタイミング悪かったかな……?」

【うん。少し勘違いしているみたいかもね】

それで出久はまたしても『全言語理解&服従』を使用しようとしたが、それより前に、「落ちて着け! お前たちはこの俺が守るっていったろ! 任せろって!」

そんなどこか中性的な声が聞こえてきたので、とりあえず出久は構えを解きつつも、

「あの一、すみません……なにかお取込み中でしたか?」

と、下手に出てなんとか話し合いに持つて行こうとしていた。

ただ。

「猫娘!? かあいいな……」

ゴブリンの群れの中から出てきたスライムの一声がそんな反応だったために出久は「うーん?」と首を傾げる事態になっていたとか。

俺、スライムのリムル。

なんやかんやあつてつて言ってもいろいろあつただけど、この世界に転生してきて暴風竜ヴェルドラとも友達になったあとに、ヴェルドラの封印を解除するためにヴェルドラを胃袋に捕食したあとにスキルを磨いて、封印の洞窟を出た後にこうしてゴブリン達の事を守るって約束したばかりなのに、なんの気配もなく突然小学生くらいの子供の猫娘が現れたので興奮していた。

だつてさー、つぶらな瞳に少し素朴っぽい感じの顔立ち、それでも可愛くて猫耳がチャーミングであり、二股に分かれた尻尾もゆらゆら揺れていてカワイイ！

つていうかさ、大賢者。

なんでこんな子が近くににいるのに知らせてくれないのさー？

【告。敵意が感じられなかったために知らせるほどでもないと】

そーかい。

ま、敵意がないなら都合だな。

この子もはぐれちゃったのかな？

できればゴ布林達と一緒に保護したいと思うんだけど。

【解。魔素量がかなり強力と見られます】

そうなの？

ま、いいけどさ。

それじゃ話しかけてみるか！

「あの一……」

おっと！

俺としたことがあちらから先に振られてしまうとは。

それじゃ改めて、

「俺、スライムのリムル。悪いスライムじゃないよ？」

「ぶふっ……」

おや？ なにやら意外な反応。

ここで笑いが起こるといふ事はなにやら知ったようなフレーズでも知っているのかな？

「笑うことないじゃないさー」

「あ、ごめん！ なんか言い草がちよつとユーモアあって面白いなって。それと自己紹介してもらって悪いと思うんだけど僕、まだこの世界では名前はないんだ。

だから今は『イズク』って名乗ってるの」

「イズクちゃんね。わかった！ よろしくな！」

それにしても、イズク、ね……。

なんか日本人みたいな名前だな。

あとで二人つきりで話し合ってみるのもいいかもしれない。

もしかしたら俺と同じで転生者かもしれないね。

「うん。ところでなにやらお取込み中だったみたいだけど、よかったら聞かせてくれな
いかな。なにか手伝えるかもしれない」

「そうだなー……村長。どうする？」

村長を呼ぶと俺の近くまで寄ってきて、

「リムル様、構いませんぞ……。もう敵意がないのは分かり切っておりますから。イズ
ク殿、よろしくお願いしますぞ」

「うん。村長さん」

それから俺とイズクちゃんは村を案内されているんだけど、どうやら怪我人がいっぱい
いるらしくて……。話によると牙狼族にやられたらしく、唯一ネームドのリグルという
奴もやられてしまったらしい。

どうやらそいつのおかげでなんとか村を防衛できていたとかで……。

うーん、死んじやったのか。

それじゃ今生きている奴らだけでも治してやるか！

そう提案しようと思っただけど、

「あ、それじゃ僕が癒そうか？」

なに……？

イズクちゃん、癒しのスキルでも持っているのかい？

でも、まだどうか分らないから。

「待った、イズクちゃん。まずは俺の方から試してもいいか？」

「試すって？」

首を傾げるイズクちゃんはやはり可愛いなあ……。

っと、呆けている場合じゃないな。

俺はすぐさまスライムボディを使って怪我人の一人に覆いかぶさって体の中に入れて回復薬をぶっつけた後に外に放り出す。

すると思っただ通りに怪我人であるゴブリンは目を回してはいるが完全回復していた。

「わあ……。すごい回復力だね。なにをしたの？」

「フフフ。まだまだ内緒さ。でもこれで俺も試すことができたんで、お次はイズクちゃんの手を見せさせておくれよ」

「うん。いいよ」

それでイズクちゃんは足とか腕とか欠損している子達の方へと向かっていった。

あれ……俺の回復薬でも治るのかな？ 欠損再生って高等なもんじゃね？

だけど、そんな俺の不安とは裏腹にイズクちゃんから優しい光が溢れてきて体の傷はもちろん欠損していた腕もまるで逆再生かの如く生えてきた。

すごっ!?

これもスキルなのか!?

「あ、あれ？ 腕が!!」

「よかったね」

「ありがとうございませす!」

すごいなあ……。

こんな高等なスキルを使っただっていうのに全然疲れていない様子じゃない。

【告。治癒のスキルを使ったと同時に彼女の魔素量が上昇しました】

はっ!?

そんな簡単に魔素量って増やせるの!?

普通使ったら減るもんじゃないのかなあ……。

なにか、特殊なユニークスキル持ちなのかな？

あとでどんなスキルか聞いてみよう。

それから出久は治療を続けていき、全員癒し終わる頃になにやら先ほどリムルが命令しておいたのか木で作られた柵のようなものが村の入り口に作られていた。

「これだけで平気かな？」

「少し不安だよねー」

出久とフォウは対策的に不安を感じていたのだが、

「だいたいじょーうぶーえいー！」

するとリムルがなにやら糸のようなものを出して柵に絡めていく。

【糸のようだね。しかも粘着性やら鋼製やら二種類の糸みたい】

フォウのその知らせに出久はなるほどと、相槌を打った。

とりあえず創造はしないで済みそうだなと感じていた。

あまり力は見せない様にと言われているから今は様子見だねと出久は一步下がって見ている。

「リムルさん。この糸、どうやってるの？」

「うん。洞窟で蜘蛛から奪ったんだ」

「奪った？」

「うん。俺のスキルでね」

それを聞いて出久は少し微妙な気分になっていた。

奪うというはどうしてもオールフォーワンを連想してしまうからだ。

「イズク……このリムルっていうスライム。少し当分の間観察している方がいいと思う。まだ善性なのか悪性なのか判断しづらいから」

『そうだね……悪に染まっているとしたら退治しないとだしね』

リムルとしては別になんてことないのだが、こうして出久達からは少しばかり警戒されるようになっていた。

そもそも奪うと言ったら問答無用のイメージがあるために、出久としてはあまり容認できない感じだろう。

リムルと出久。

二人の思惑はこうして少しズレつつも時間は流れていき、夜になって狼のような遠吠

えが響いてきた。

「さて、迎え撃つぞ！」

「「「おー!!」」」」

出久、リムル……両名にとってこの世界に来て初めての集団での戦いが幕を開けようとしていた。

NO. 006 牙狼族と事情聴取

夜になって遠吠えとともに牙狼族の狼達がゴブリンの村へと攻めてきた。

イズクが心配だけど、まあ俺よりは強いんだろうな。あれでも。

ちなみにちゃん付けは慣れないのでやめると言われたのでイズクって呼んでいる。

それはそれとして牙狼族が攻めてきたんだから啖呵切った以上、俺がゴ布林達を守らないとな！

「とまれー！」

俺の言葉とともに牙狼族の何匹かは足を止める。

うーん？ よく見ればこいつら何匹か昼間にスキル訓練の時に見た奴らか？

額に星マークがついている奴は特に強そうだな。

とにかく、

「いいか。一度しか言わない。しっかりと聞けよ。このまま引き返すならなにもしない。だからさっさと立ち去るがいい」

「スライムごときが！」

しつかりと忠告はしたんだけどな。

やっぱりそう簡単には聞いてもらえないよな。

その証拠に柵を乗り越えようとする狼達^{ウルフ}が次々と罠にかかっていた。

うん。急場しのぎとはいえ、対策はばっちりだったようでよかったよ。

「今だ。放て！」

その言葉が合図となって木の上で弓を構えていたゴブリン達^{ゴブリン}が次々と矢を放つていく。

それで何体もやられていくのを見ていて焦っているのだろうボスらしい狼の顔はすぐれない。

「ぐぐぐ……スライムごときが」

「どうだ？ 降参する気になったか？」

「誰が！」

その時だった。

「キヤー!？」

「うわー!？」

「!？」

後方の方からゴブリン達の叫び声が聞こえてきた。

「ツ！ 別動部隊か！ しまった！」

「フフフ……どうだ」

なにやら含み笑いをするボス狼の顔が憎たらしい。

俺なら対処可能だけどゴブリン達だけじゃすぐにやられちゃう！

でも、ボス狼を放っておくことも！

万事休すかと思つた瞬間に響いてきたなにかの叫び声。

「にゃあああああー……ツツツ!!!」

その叫びとともに別動隊の気配が一瞬にして消え失せたのを感じて、これってもしかしてイズクがやってくれたのかという感想が生まれた。

出久は柵を作っている反対側の方で陣取っていた。

もしかしたら別動隊が来るかもしれないからだ。

【イズクも心配性だね】

「そうだね。でも、やっておくに越したことはないからね」

そんな会話をしている時に、

「牙狼族が攻めてきたぞ!!」

という連絡が聞こえてきた。

それで出久も何人かのゴブリンを引き連れて反対側に移動していた。

「しかし、イズク殿。本当にこちらにもやってくるのでしょうか?」

一人のゴブリンがそう聞いてきた。

それに出久はというと、

「僕の思い過ぎしならいんだけど、もし奇襲をかけてくるとしたら構いませんが
らね」

「はあ……。リムル様のお助けになるのでしたら構いませんが」

「ごめんね。手伝ってもらっちゃって」

「いえ! これも村を守るためですから強者のいう事には従います!」

「あはは……強者か。僕って見た目こんなだけで強く見えるの?」

「あはは。なにをおっしゃいますやら。普通に我らと比べましてもリムル様同様にすごい魔素量をイズク様はお持ちだという事は分かります。それに昼間に傷を治してもらった恩を返さないと我らも示しがつきません」

そう。

いま、出久に着いてきているゴブリン達はリムルとは別に出久に治癒してもらったものばかりなのだ。

「そっか。ありがとね」

「いえ」

そんな会話をしている時であった。

出久達が陣取っている場所の近くでまたしても狼の遠吠えが聞こえてきたのだ。

「やはり奇襲してきたか! みんな、構えて!」

「はっ!」

それで付いてきたゴブリン達は木の上に登って弓を構える。

そして出久は迫ってきていた狼達に向けて、

「ごめんね……でも、僕も覚悟しないといけないから」

そう呟きながらも、

——ユニークスキル『絶対衝撃』発動——

「イズク！ 前より強力になってるから手加減はしてね！」

『うん！』

そして息を思いつきり吸い込んで口に力を溜めていき、そして、

「にやあああああああ————ッ——ッ——ッ！！！！」

咆哮は放たれた。

衝撃は波を顕現させながらも奇襲部隊へと直撃していき、

「ガッ!?!」

「ウガッ!?!」

狼達はその場で衝撃を受けて動きを強制的に止められてしまう。

「捕えよ!!」

そして叫び終えた出久は新しい動作とともに手を掲げて、衝撃をその場で固定させる。

衝撃の中に閉じ込められた狼達はすべてが耐えられずにやがてその場で気絶する。

「ふう……。なんとか無力化成功だね」

出久は殺さずに済んだことをなんとか喜びつつ、正面の方ではリムルがボス狼を打ち取っていた。

牙狼族のボスは倒すことができたけど、先ほどの叫び声はやっぱイズクなんだろうなあ。

借りを作っちゃったなあ。

そんな事を思いつつも残りの牙狼族達に叫ぶ。

「聞け！ 牙狼族よ！お前たちのボスは死んだ！ 選ぶがいい。服従か死を!!」

つて、調子に乗って言ってみたはいいけど、俺ってなんか少し悪者調？

いやいや、これもゴブリン達の村を守るためだ。

そして、俺の叫びにそれでもどうしていいか分からないのだろう、狼達はその場で止まっていた。

しかたがない……。

それで俺は『捕食者』で死んだボスの牙狼族の体を吸収し、大賢者に解析してもらって擬態を行う。

すぐさまに俺の姿は倒したボスよりも大きな牙狼族の姿になっていた。

そして脅すように悪いけど、

「ククク……仕方がないな。今回だけは見逃してやろう。我に従えぬというならばこの場より立ち去る事を許そう!! さあ、行け!!」

と、とどめの一撃を放った瞬間であった。

てつきり逃げ出すものと思われたのだが、

「「「我ら一同、貴方様に従います!!」」」

と、あっさり俺に従っちゃったよ……。

おいおい、いいのかい。そんなに簡単に服従しちゃって。

俺はこの時、牙狼族の群れの絆を甘く見ていたんだろうなあと思いきり知事になった。

【告。後方より怒りの波動を感じます】

「へ……?」

牙狼族の姿のまま後方へと振り向くと、そこにはとてもにこやかな、でもお怒りのイブクの顔が映った。

あれ……？もしかして、俺、なんかやっちゃいました……？

「リムルさん？ すこーしあなたのスキルを教えてくださいませんか？」

「ひっ!？」

すぐさまスライムの姿に戻ってお辞儀をする俺の姿があった。

威厳……？ そんなものつくに捨てたよ……。

出久はその後のリムルのスキルについて聞き出していた。

「ふーん……ユニークスキル『捕食者』ね。それで倒した相手の事を喰らえば能力と姿を手に入るのか」

「はい……」

「まあ、僕としても納得は出来たからいいけど、むやみやたらに喰いまくらないでね？ 必要だと思っただけなら使っただけなら使っただけいいよ」

「そんな殺生な……」

「無駄口叩かない！最後に一つ聞くけど……悪用だけはしないでね？僕はそれと似たスキルを持つものが過去に悪事を働いて社会を乗っ取ろうとしたのを見たことがあるから」

「それって……」

「僕が言えるのはここまで。それじゃみんなのところに戻ろうか。最後まで責任取るつもりなんでしょ？」

「それは当然だ！」

「それならいいんだ」

それで出久としても心の痞えが取れたような気持ちになった。

「さて、それじゃ僕はこれからどうしようかな」

「一緒に来ないのか……？」

「うん。僕はいまとある人からある依頼をされているんだ。暴風竜ヴェルドラって知ってる？その竜が消えた原因を調べているんだ」

「……………」

そこでリムルは冷や汗を流して無言になってしまっていた。

そんなリムルの様子に出久は怪訝な表情をしながらも、

「その沈黙……何かを知っているのかな？」

「その……俺の能力はさつき教えたよな？」

「うん。まさか……」

「その、うん……今ヴェルドラは俺の中にいるんだ……」

「ええ？」

それで出久はまだゴブリン達のもとにもどらないでリムルから事情を聴きだしていた。

そして、

「そっか。それじゃ結果的にはリムルさんのそばにいれば大方事態は把握できるんだね」

「おそらく……」

「んー……」

それで出久は心の中でフォウと相談していた。

「イズクう？ どうするー？ このままリムルに着いて行くの？」

『そうだね。静観する意味も込めてとどまるのもありかな？ あとでもつとリムルさんについて話も聞こうと思うし……それになんか同じ転生者の気配がするし』

「そっか、わかった。イズクはリムルの補佐をしていくわけだね」

『結果的にはそうなるね』

と、フオウとの会話を終了させて、

「それじゃ、リムルさんに着いて行こうかな。もともと次の居場所なんて決めてなかったし」

「そうか！ それはありがたいよ！」

素直に喜ぶリムルに毒気を抜かれながらも出久はリムルとともにゴブリン達と牙狼族のもとへと歩いていくのであった。

——こうしてリムルと出久の道が重なった瞬間であった。

NO. 007 フォウの説教

牙狼族との戦いが終わって一応もう時間が時間なので朝になったらまた話し合いをしようとするは言い、さつきまで戦っていた相手同士なのにすでに一緒に寝てしまっているゴブリンと牙狼族の光景を見て、

「いいものだね……」

【うん。落ち着いたところで、イズク……。すこし、いいかな？】

『なに？ フォウ』

【私は決してイズクのイエスマンなわけじゃないから言わせてもらうね。さつき、リムルに言った話……私にとってすこし傲慢に見えたんだ】

『えっ……？』

先ほどのというのは『むやみやたらに喰いまくらないでね？ 必要だと思った時にだけなら使っていいよ』というリムルに対しての出久の言いつけ。

『ど、どうして……？ だってリムルさんが悪に染まらない様について思った言葉

なんだよ?』

「うん。でもね? 私にはすくなくならず傲慢に見えちゃったんだ……。イズクは私がイズクに話した過去の事、覚えてる……?」

『忘れるわけないよ。オールフォーワンに捕まって強制的に『生命力を奪う』個性を使わされて苦しんでいた事は……』

「うん、ありがとねイズク。でもね? 私はオールフォーワンに捕まる前はすくなくとも自分の意思で『生命力を奪う』個性を使用していたんだよ」

『えっ……それって』

「そう……苦しい世の中を生き抜くために、生きるためには妖術や個性を使わないと……私は、ダメだった。」

……群れに入れない、人に飼ってもらってもまた最初の時の様に命を吸い取って殺してしまうかもしれない、一緒の時間を生きられない……そんなさまざまな感情が緋い交ぜになって、どうしようもない気持ちを発散するために好き勝手に暴れた結果が『猫又の怪』と呼ばれた一因なんだよ……」

『フォウ……』

まるで懺悔でもしているようにフォウは自身の過去の傷を開きながらも、苦しいけどそれでも出久に分かってもらえるために敢えてその話をしていく。

「生きるためってというのは過剰表現だけど、それは決してはずれじゃない。そしてそれはリムルにも該当するんだよ。私達のもとの世界ではゲームとかでもいいけどスライムってどんな存在だった……？」

『主人公が最初期にやつと倒せるモンスターだけど、そのうち一撃で倒されてしまうような儂い存在……かな』

「そう。リムルはそんな存在だから生きるのを必死に頑張っているんだよ。襲われればスキルも使うしなんでもする。」

暴風竜ヴェルドラっていう存在と出会わなければもつと苦労したかもしれない
フオウの言い分はだいたい当たっていた。

大賢者と捕食者いうチートスキルがあるとはいえ、ヴェルドラに会わなければリムルはずつと封印の洞窟の穴倉の中に孤独を味わいながらもいたかもしれない……。

「これはイズクをちよつと侮辱するようにも聞こえちゃうかもしれないけど、私と出会わなければもしかしたらイズクは別の道を行つたかもしれない。オールマイトにも振り向いてもらえなかったかもしれない……もしくは無個性のまま個性社会に耐えきれずに最悪自殺したかもしれない……ありとあらゆる可能性がイズクにはあったんだよ」

『……………』

そんな、諭すかのようなフォウから次々と出てくる言葉に、出久はすこし泣きそうになっていた。

そうだ、色々な奇跡のような出会いがあつていまの自分があるのに、そんなオリジンを忘れていたなんて……出久はそれで後悔する。

【そして、これはイズクに言う最後の説教だけど、リムルの行いを否定するという事は私の過去の行いも否定しちゃうの……?】

『そんなこと……!』

【そう……イズクはそれくらいに制約をリムルに押し付けようとしているんだよ。

すべてが正しくて間違っているかなんてわからない。

リムルが悪の道に進むかどうかだなんて誰も予想できない。すべてはその時の状況によるんだよ。

オールフオーワンももしかしたら『個性を奪う』なんて個性が発現しなかったらもつと違った形になっていたかもしれない……。

だから、イズクもリムルを補佐しようって決めたんでしょ?】

『うん……』

【だからさ、リムルを縛つてあげないで。きつと自由に動いた方が良い方に好転すると思うから。イズクが私を救ってくれた時の様に……】

そこまで言われて出久は心の中で、

「確かに傲慢だったね……何様もいいところだ。トレイニーさんは言ったじゃないか。この世界は弱肉強食だと。リムルさんもそれで強くなろうとしているんだ。それを他人の僕が妨害しちゃダメだよな」

そう思ったあとに、

『うん。フオウ、ちよつとリムルさんに謝ってくる』

「うん。そうした方がいいね。それでこそ私が大好きな人の事を思いやれるイズクだよ」

『……………フオウ、ありがとう』

【うん♪】

それで近くで寝ているのか分からないが動いていないリムルに出久は近寄っていつて、

「リムルさん。少しいいかな？」

「お？どうしたんだ、イズク。改まって？」

「うん。ちよつと謝ろうと思って」

「謝る？なにを……？」

「うん。僕はさつき君の事を縛ろうとした。スキルをむやみに乱用しないでって言って

……

「……………」

リムルは真剣な雰囲気だと感じて黙って聞いてくれている。

それだけで出久はありがたい気持ちになって、先ほどのフォウの話をなぞるように話して謝罪をリムルにした。

俺は少し感動していた。

さつきは怒ってたのに、今はすぐに謝罪をしてきて、そして「スキルは自由に使つていいよ。僕が口出しできる立場じゃないからね」と自由を許してくれた。

それだけでも俺はちよつと心休まる気分になっていた。

「でも。なんかイズクつて年上な感じがするよな。ちよつと活発だけど冷静だし、牙狼族の奇襲も読んでいたみたいだし」

「まあ。生前の勘つて奴かな」

「生前？　　つてことはやっぱりイズクも！」

「ということはやっぱりリムルさんも？」

「転生者!!」

思わず嬉しくなる。

「こんなにも早く同郷のものとお会いできるなんて！」

「そっか。名前とかでそんな感じはしていたんだ。まるっきり日本人の名前だもんな。

『イズク』って」

「そうだね。でも、それじゃリムルさんって生前はどんな感じだったの？　　どんな個性を持っていたの？」

「個性……？　個性って性格の事か？」

「えっ？」

「うん？　　なんだろう。イズクとの会話で微妙な違いがあるみたいだ。

それで俺はためしにイズクの世界について聞いてみた。

すると出てきたのはとんでもない内容だった。

なんと、世界総人口の8割がなにかしらの『個性』というものを宿してヒーロー、あるいはヴィランとして活動していたなんて！

「それってなんてアメコミ!?!いや少年ジャ○プ系かな!？」

なんか久々にオタクな気分が蘇ってきたぞ！

それからいろいろと出久の周辺事情について聞いていくと、結構重たい話が出てきた。

聞けば聞くほどに可哀そうになってくる感じだ。

でも、それでも最後は生命力を全部消化して天寿を全うしたあとに、俺みたいに世界の声でこの世界に転生してきたんだとか。

「刺されて死んだ俺とは大違いな差が出来たな。だからイズクはそんなに強いんだな」

「僕はまだまだ強くないよ。たまたま運のめぐり合わせでフォウと出会って、色々な人に助けられながらできた行動だったから。」

それにみんなからもらった個性がなかったらもつと弱かったかもしれない」

そうなんだよなー。

その貰った個性達が統廃合された結果が今のイズクのスキルなわけで、一つ一つどんなスキルか聞いていくとどれもこれも俺より強力なもんばっかじゃん……と落ち込む。

「すごいんだなー。だから大賢者も言っているけど聖なる気配も出せているのか」

「あんまり僕は納得していませんけどね」

そんなことないと思うけどなー。

万単位で人の命を生涯救い続けてきたイズクは間違いなく聖人に近いものがあると

思うし……。

謙遜しちゃうところも性格故って感じかな。

よし！

「それじゃ改めて言うけど俺の仲間になつてくれないか？ イズクがいたらきつと楽しくなりそうだって俺の勘が告げているんだ」

「こんな僕でよかつたら……よろしく、リムルさん」

「おう！ よろしくなイズク！」

そこまで言つて俺とイズクはこうして本当の意味で仲間になれたのかもしれないと感じた瞬間だった。

でも、そっか……。

そういうえば、まだイズクって名前は这个世界では正式な名前じゃないんだ……。

明日やろうと思つていた名付けをイズクにも正式に付けてあげるのもいいかもな。

そう思いつつ、夜は更けていくのだった。

NO. 008 名付けと進化

リムルと再度仲間になるという話で盛り上がってその翌朝の事であった。

リムルはゴブリンと牙狼族を集めて見回していた。

出久もリムルの隣に立ちながらも、

「結構野性味ある所帯だよな」

「そうだな。指示を出して村を整備していきたいんだけどな」

「僕の仙術使う……?」

「いや、イズクに頼りきりだとかいつらの為になんないだろ? だからいざつて時に力

を貸してくれ」

「わかったよ」

それでリムルは村長にとあることを聞いた。

「そういえば村長。お前に名前なんてあるのか?」

「いえ、魔物は普通名前などもちません。それに名前などなくとも種族間で意思の疎通は可能ですので今までそんなに苦労はありませんでした」

「そうなのか……でも、俺とイズクが呼ぶときに苦勞するしな。そうだ！お前たち全員に名前を付けようと思うがどうだろう？」

リムルの提案に一気に場はざわつく。

それは出久も同じくで驚いていた。

「その……リムルさん？ 名付けはとても大変な行為だつて知ってます？」

「そうなのか？ まあどうにかなるだろ」

「大丈夫かなあ……？」

出久は一途の不安を感じていたために、

『ねえ、フオウ。リムルさんが魔素が切れそうになったら与えるのはどうだろうか？』

【いいと思うよ。その分すぐに回復してさらに倍増するしね】

出久はそういう方針をすぐに立てた。

なんか名付けだけで大変な騒ぎになってんな。

イズクも言っていたけど、そんなに大変な行為なのか？ 名付けって……。
まあなんとかなるだろ。その時はその時だ。

「それじゃまずは村長から行こうか」

「おお……！」

村長がすごい感動した顔になっている。

そこまでの事なのか……。

「村長とその息子は村一番の戦士の『リグル』の身内だって言っていたよな？」

「は、はい……」

「では、父親の村長はリグルから名前を取って『リグル・ド』を名乗れ！」

「おお……っ！ ありがとうございます、リムル様！」

「そしてそのリグルの弟は兄の名を継いで『リグル』を名乗れ！」

「はい……」

それから俺は次々とゴブリン達に名前を付けていった。

それを心配そうに見ているイズクの視線が気になるけど、まあまだ大丈夫大丈夫……。

嫌な予感なんて最後までやってから後悔すればいいし。

「お前は『ゴブタ』！」

それから順に『ゴブチ』『ゴブツ』『ゴブテ』『ゴブト』と名付けていくんだけど、大賢者は何も言っていないし、なにがそんなに心配なんだろうか？

村長改めリグルドもそれで、

「リムル様、大丈夫なのですか……？」

「ん？」

「リムル様の魔力が強大なのはご存知ですが、それでもそんなに一度に大勢に名前を与えるなど……」

「まあ、大丈夫だろう？ いまのところなんともないし」

「さすがリムル様だ……」

いちいち反応がすごいな……。

それからオスのゴブリン達は終わったので次はメスのゴブリン達に名前を付けていく。

それも難なく終了して、お次は牙狼族の番となった。

まず俺が倒したボスの息子である額に星型の痣がある狼。

なんかこいつには特別な名前を付けたいよなー。

俺のファミリィネームを加えるか！

テンペスト？ 嵐……そして牙でランガ……？

安直だけどいいと思う。

そうして名付けをしようとした瞬間だった。

「リムルさん。タイム！」

「ん？ どうしたイズク？」

イズクが突然タイムと言ったので、俺は一旦名付けを停止させた。

なにやらイズクの目が光っているけど、妖術でなにかの魔眼でも開発したのか？

羨ましい能力だよな。ホントに。

「僕の中でリムルさんの魔素量を見た感じ、その子に名前を付けた瞬間に魔素量が底をつく感じだよ？」

「なにっ!?! そうなのか!?!」

おい、大賢者。そこらへんどうなのさ？

そう聞いてみると今まで沈黙を保っていた大賢者が、

【告。その通りです。もう少しでスリープモードに入るかもしれません】

おおい!?! そういうのは早く言ってくれよ！

あつぶねえ!!

肝心な時に話をしてこないな！

そんじゃどうするか。

俺は考えを巡らそうとした時だった。

またしてもイズクがある提案をしてきた。

「それで僕から提案があるんだけど、いいかな?」

「なんだ?」

「僕がリムルさんに魔素を分け与えるのはどうかな? 使用した魔素分全快するくらい

に」

「イズク様! それはなりません! それはあまりにも自殺行為です!」

すぐにリグルドが止めに入るけど、俺はそこまで心配はしていないんだよな。

だって、イズクって魔素を使用したら使用分倍に魔素量が膨れ上がるスキル『無限成

長』を持つてるし。

いやー、チートスキルだよな。

「リグルドさん。大丈夫です。それじゃリムルさん、いつくよ?」

「おう! どんとこい!」

イズクが魔素の光を俺に注ぎ込んでくるのを感じて、って、おおおおお!

なんだ!?!すごい量の魔力が流れてくんだけど!!

【告。魔素量が全快しました。魔力総量もアップしました】

はやっ!?

「はあ、はあ……こんな感じでどうかな……?」

少し息を切らせているイズクだけどすぐに回復するだろうし、

「ありがとな、イズク」

それで俺はボスの息子にもう一回振り返って、

「それじゃさつそくだけど、お前の名は嵐の牙で『ランガ』だ!」

「わおーん!!」

これでランガも終了した。

他の牙狼族にもつけてやりたいけど、先に付けておきたいことがある。

それで俺はイズクの方へと振り向いて話をする。

イズクはちよつとわかっていないのか首を傾げている。

くつ! 相変わらずあざとい……ッ!

俺はなんとか邪念を振り払いつつ、

「イズク。改めて仲間の証としてお前にも名付けをしようと思うんだけど、いいかな?」

「え? 僕にも? でも、いいの……?」

「いいっていいって! さつき魔力を回復させてくれたお礼も兼ねて受け取ってくれよ。今ならまだ何人でも名前を付けられそうだし」

「うーん……まあ、いいのかな?」

イズクも納得してくれたようでよかった。
それじゃいくとしますか。

「お前の名前は正式に『イズク』とする」

「うん、ありがとう。リムルさん」

どうだ？と聞こうとした瞬間にすごい虚脱感に襲われた。

あれ〜？

さっき魔力全回復した筈だよねー？

【告。スリープモードに移行します】

マジジでえ!?

もしかしてイズクがさっき全回復してランガに使った分とは別に残っていた魔素を
根こそぎ持つて行ったつて事か!?

魔力感知も切れたし、できることはなんもないなあ……。

回復するのを待つしかないか。

やっぱ俺より強い魔物だからかな？

聖獣は伊達ではないって事か。

ベチャアツと溶けてしまったリムルを見つつ、出久は自身の身体に変化が起きるのを実感していた。

それは他の者も同様で進化の光でもあるのか身体が光っている。

それでも、リムルの事が心配なのか「リムル様！」と連呼されている。

出久は仕方がないなと思いつつも、

「多分大丈夫だよ。少しすればリムルさんは回復すると思うから。それよりみなさんも

進化したら体の成長とかもあるでしょうし、まずは各自で服の手配をお願いします」

「わかりました！ イズク様！」

「イズク様が大丈夫だと言うのならリムル様もきつとすぐに回復なされるはず！」

「それでは宴の準備でもしましょうか！」

と、盛り上がりを見せていた。

すると、そこに牙狼族のボスの息子改めランガが出久に近寄ってきた。

ランガも進化の途中なのか身体がどんどん大きくなっていくのを感じる出久。

「イズク殿。少しご相談があるのですが……」

「なに?」

「いえ、我が主から名を頂いたと同時に、なにやらイズク殿との繋がりも感じられるのです。他の同胞などはそんな感じはしないというのですが、どういふ事でしょうか……?」

ランガのその言葉を聞いて出久はすこし考える仕草をしつつ、フォウに尋ねてみた。

フォウはそれではなにかわかったのか、

「たぶんだけど、さつきリムルにイズクの魔力を渡したばかりで、リムルにイズクの力が込められている中ですぐにそれをランガに使用したからじゃないかな?」

『それが正解、かな?』

それでフォウとの会話の内容をランガに教えると、

「そのようでしたか! 分かりました! ではイズク殿も我が主という事になるのですね!」

「え? なんか突飛な感想だね」

「それでもごさいません! なにせ、おそらくですがイズク殿のスキルもいくつか使えるようになったかもしれないと我が勘が告げているのです」

「……………たとえば?」

「なにやら氷と炎と雷の力が使えるようになったみたいです!」

「なるほど……それじゃランガだけ特別な固体になったんだね」

「はっ！ 大変ありがたくございます！では我は他の同胞の統率を行いますので、ではまた！」

そう言つてランガは群れのもとへと走つていった。

【とりあえず、イズクも進化したようだし使えるようになったスキルの確認でもしていようか】

『そうだね。………なんか身体的成長はそんなにしなかつたのが悲しいけどね』

【私の計算だと5cmくらい背が上がったよ？ 胸も少し膨らんだし】

『そういう情報は今はいいです……』

【あと、種族が猫人族から聖猫人族に進化したみたい。聖なる力の効果が上がったのはいいことだね】

『それは………どうなんだろう……？』

ともかくにも出久はリムルが起きるまで待つことにしたのであった。

リムルが起きたらいよいよ村総出での宴の始まりだから出久も手伝う事にしたのであった。

NO. 009 リムルの目覚めと進捗

リムルがスリープモードになってから三日経過した。

その間にゴブリン達と牙狼族達は見事に進化していた。

そして進化の際に『世界の言葉』を聞いた時に出久はというと、

「なるほど……世界の声だったんだね。この声」

【そうみたいだね、イズク】

「はい。その様子ですとイズク様は初めて聞いたわけではないのですね？」

「はい。………それよりリグルドさんもよぼよぼだったのに、随分とまあ……」

リグルドはまるでオールマイトか！と言いたいくらいに筋骨隆々な姿に進化していた。

「そういうイズク様はそんなに進化しなかった御様子ですね」

そうなのである。

少し背が高くはなったが、それでも出久の身長は小学生高学年くらいの身長のままである。

昨日まで同じくらいの子身長だったゴブリン達とは差が出来てしまった。

「まあ、種族が猫人族から聖猫人族には進化したみたいなんだけどね」

「そのようですね。イズク様の聖なる気配が昨日より確実に増えていきますからな。それに、とても可愛らしいですよぞ」

「あはは……。ありがとう」

出久はもう少し諦め気味になっていた。

いつその事、完全擬態で本当に成長してしまおうかとも思ったほどには。

そんな事を感じつつ、リムルが配置されていた小屋の中に入っていくとそこではハルナが面倒を見ていた。

「ハルナさん。リムルさんの様子はどう？」

「あ、イズク様！ はい、そろそろ起きる頃だと思うのですが……」

「そうみたいだね。でも、なんでみんなは僕の事をリムルさんと一緒に様付けするの？ なんかむず痒いっていうか……」

そう出久がハルナに問うと、ハルナは当然と言わんばかりに、

「イズク様はリムル様と魔力のやり取りをして同格の存在となりました。ですからイズク様も私達のもう一人の主なのです」

「魔力のやり取り……」

「まさか、繋がっちゃったかな……？」

それで思い出すのはランガに名付けをする前にリムルに魔素を送り込んだ時である。それで世界の声はリムルと出久は同格の存在だとゴブリンや牙狼族の一同に教えたらしい。

「そんな事になっていたんだね……」

「はい。ですからイズク様はリムル様と同等の存在なのです。それに私個人としましてもイズク様は容姿がとても可愛らしいので愛らしく感じています」

「そ、そう……」

出久はハルナの嘘偽りない言葉に恥ずかしくなって顔を赤くしながらも猫耳はふにやつと垂れて尻尾は嬉しいのかぶんぶんと揺れていて、それでハルナの琴線に触れたのか、

「ああ……イズク様。本当に可愛らしい」

「は、ハルナさん……?」

「なんか様子がおかしくなってるね。新しいスキルのせいかな?」

なにか、危険な雰囲気になってない?と思う出久とフオウだったが、その時にタイムングよくリムルが目を覚まして、

「俺、復活!!」

「リムル様!」

「リムルさん！ なんかいろいろとちようどよかった！」

リムルの目覚めに出久は助かったという気持ちになっていた。

そんなリムルはというと、

なんか、目を覚ましたはいいんだけど……すっこし成長しているとはいえイズクの事はなんとか確認できた。

でも、その隣にいる可愛らしい女性は誰だろう……？

「リムル様。お目ざめしたのですね。今リグルド様をお呼びしますね」

そんな事を言つて謎の女性は小屋の外へと出ていった。

「そのさ？ イズク、いまの女性って誰……？」

「困惑するのはわかるよ。でも、あの子はハルナさんだよ」

「ハルナだつて!?!」

イズクの言葉に少し信じられないといった感じの俺がその場にいましたとき。それでイズクが短く要約して教えてくれた。

名付けで進化したのだと。

だからかあ……。名付けは大変な行為ってそういう事だったんだな。

今度から気を付けないとな。

またスリープモードになるのは勘弁だから。

そしてハルナが出て行って少しして、

「リムル様！ お目覚めになりましたか！」

そんな豪快な叫びとともにリグルドが、リグ、ルド……。？なんだこの筋骨隆々の魔人は！？

名付ける前はよぼよぼのじいさんだったよね！？

「これも進化って事で受け止めてね。リムルさん」

「お、おう……」

どこか達観しているようなイズクの言葉に俺もなんとか現実を受け止める。

さらに次の瞬間には小屋が崩れてとつてもでっかい狼が中に入ってきた。

「我が主！ ご快復心よりおめでとうございます！」

「お前……もしかして、ランガか？」

「はっー」

なんかボスより大きくなっていない!?

それに後からやってきた他の狼達も毛並みが変わって進化しているのを伺える。

あれ? ランガにしか名前つけてないよね?

それでのちほどにランガに理由を聞くと、牙狼族は『全にして個』らしく、ランガが進化したと同時に名前を与えていないけど他の奴らも進化したらしいと……。

それで種族も『嵐牙狼族<テンペストウルフ>』に進化したらしい。

名付けてすげー……。

しかも、

「そして、我がもう一人の主であるイズク様より力も授かりました。リムル様の嵐に加え、炎、氷、雷の属性も宿しました!」

「なんとー!」

「そういう事らしいんだ」

それで理由を聞いてみると、あの時ランガの名付けの時にイズクの魔力も拝借したから、そのはずみで俺とイズクのなにかしらの回路が繋がったらしく下手したら俺はイズクの魔力も今後何度か拝借できるようになったらしい。

【告。個体名：イズクとの接続を確認。同格の存在となりました】

なるほどなるほど……。

もしかして、俺もイズクの力を使えたり？ いや、そんなうまい話はさすがにないか。

「それと僕もなんか猫人族から聖猫人族に進化したらしいんだ」

「ほうほう？ あまり胸は成長していないような……あいたつ!」

「さすがにセクハラだよ……?」

「すみません……」

素直に謝っておいたが、そうか。

だから聖なる気配がさらに増してんだな。

「それになんかユニークスキル『信仰の加護』なんてものまでついちゃったんだ」

「それは!」

どうも、生前からの功績がついにスキルとして形になってしまったらしい。

なんかイズクも俺同様にゴブリン達に信仰されてしまっているらしくて、外界に対して聖なる守護の力を信仰する者たちに授けるスキルらしくて、信仰している限りそれだけで聖なる守りが約束されているとかなんとか……。

世界の声ってなんかイズクに対して臆服してんじゃね?と勘ぐってしまっただ。

「ま、いつか。なんとなくだけどイズクだから納得できてしまっただよな」

「そうですな」

「その通りですね。我が主！」

「なんか、恥ずかしくなってるね……」

それで顔を赤くして俯くイズクはそれはなんといかずるいほどに可愛い。

もしかして魅了のスキルとかも付属されてるんじゃないやね？と思う。

俺も少し危うくなるからな。

魅了されない様に気を付けないとな。

それから宴が開かれて、リムルが音頭を取る事になっていたので、

「えー……それではみんなの進化と戦が無事に終わったのを祝って——かんぱ——」

リムルが過去の様にしてしまっていたが、当然リグルド達は理解ができないためにハテナ顔になっていた。

「リムル様『かんぱい』とはいったい……?」

「あ、ああ。知らなかったか」

「まあそれはそうだと思っけどね……」

それからリムルは乾杯について詳しく説明していき、なんとか理解できたのかリグル達も「かんぱい！」とコップを掲げて叫んでいた。

ちなみに、なぜかこの場に似合わない少し高級そうなコップだったためにリムルはすぐに出久の方へと向いた。

「あはは。少し創造しちゃいました」

「なるほど……」

創造だなんてなんでもありだな、とリムルは思った。

そんな事を思っけいながらも宴も終わって、これからの方針を考えけるリムルであった。

「(やつぱり家とかもぼろぼろだよな。装備も刃こぼれだらけだし……村の発展のためには知識を持つものがいたほうがいいよな。課題は山積みだな)」

それから翌日。

リムルは出久と話し合つてみんなを広場に集めていた。

わざとらしくリムルはちよび髭を付けて、いまだに騒いでいるみんなが静かになるまで黙っていた。

そしてやつと静かになったと思つたら、

「えー……いまみんなが静かになるまで5分かかりました」

「ぷふっ……」

出久はそれで恩師であつた相澤消太の事を思い出していた。

だけどやつぱりみんなはそんなリムルのジョークも分からずにまたしても首を傾げていた。

リムルはネタが通じないと実感すると、すぐにちよび髭を外して、

「えー、見ての通り俺達は大所帯になった。それでこれからトラブルを起こさない様にルールを決めようと思う」

その1：仲間内で争わない

その2：進化して強くなったかと言って他種族を見下さない

その3：人間を襲わない

リムルが提示したこの三つの条件に、しかしそこで出久は「待った」をかけた。

「リムルさん。もう一ついいかな？」

「聞こうか」

「その4に、『もし人間に襲われそうになったら抵抗も止む無し』を追加してもいいかな
「ふむ。いいな！ それも採用！」

そしてこの四つのルールが提示された。

それで早速リグルが「なぜ人間を襲ってはいけないのですか？」とリムルに聞く。

それでリグルが鋭い顔になっていたがなんとかあやしつつ、

「それは俺が人間が好きだからだ！」

「なるほど。理解しました！」

「ほんとにー?」

「はい！ それでルール4も生きてくるのですよね。もし人間が襲ってきたら抵抗して逃げるか無力化するという感じでしょうか？」

「その通りだ。頭いいな、リグル」

「ありがとうございます！」

「確かに魔物は強いけどな。人間は集団で生活している。彼らだって襲われたら抵抗もする。そんなのどっちにしても損しかないだろ？ だからなるべく手出しはせずに仲

良くしていくのもありだと思っただ」

そうリムルが説明すると、みんなは納得したのか「わかりましたー！」と声を上げていた。

「それと、リグルド」

「はっ！ なんてしようか、リムル様？」

「君をゴブリン・ロードに任命する。村をうまく治めてくれ」

瞬間、リグルドに雷でも落ちたかのように固まってしまい、次の瞬間には、

「ははあ！ 生命を賭してその役目、果たさせていただきますー！」

「うむ。頼む」

「ねえ、リムルさん。それって体のいい丸投げじゃ……」

「それじゃみんな！ 頼むね」

出久の質問にリムルはあえて反応せずに言い切っていた。

「後が怖いよ……？」

「うっすー！」

それから村づくりを始めたのはいいのだが、やはり技術がないために張りぼて小屋くらいしかできないために、どこかで技術者を雇わないとなら思っていたところに、リグルドが何度か取引をしたことがある者がいると話したので、聞いてみるとなんとその者

たちとはファンタジー世界ではそれは有名な種族。

そう……ドワーフ族という単語が出たために、

「それじゃ俺が直接交渉に行ってみるよ。イズクもいくか？」

「そうだね。僕もドワーフには興味あるし」

「わかった。リグルド、物々交換するための準備を頼む」

「はっ！昼までに用意いたします！」

それでリムルと出久はドワーフ族が住むというドワルゴンという国に向かう事になったのであった。

NO. 010 ドワルゴンに向かう道中

リムルがランガの上に乗って、リグルやゴブタなど計五組の人数含めてドワーフ王国に出発した。

それでイズクはいまどうしているのかって？

なんと嵐牙狼族達と同スピードの走りを見せながら並走していた。

《おーい？ イズクー。そんなペースで大丈夫かー？ スタミナ切れとか起こしてないかー？》

と、リムルが牙狼族のボスを捕食したことにより覚えたスキル『思念伝達』を使ってイズクに話しかけてくる。

そんなリムルの心配な声に対してイズクはというと、

《大丈夫だよ。なんか前世からの努力とかは引き継がれているみたいでこのくらいの走りなら平気みたい。それに進化してから活力がみなぎっているっていうか……》

《あー……ランガ達もそんな事言ってたな》

《うん。それに生前は山岳救助チームに入って人助けとかもよくやってたからこのくらい森の移動ならまあそんなに苦じやないかな?》

《なんでもやってたんだな……》

それでイズクは思い出す。

ワイルドワイルドプッシュキャッツのもとで本格的に訓練をさせてもらって、夏の炎天下、冬の雪山、湿地帯のぬまぬま、岩山のごてごて……およそ普通の人が訓練するにはふさわしくない場所で様々な訓練をしていたことを……。

跳んで跳ねて転がって……、個性『許容量キヤパ限界を無くす』と『オートヒール』がなかったらおそらく死に絶えていたのではないかと思う程の過酷なもの。

《無限成長でスタミナも体力も自力が上がっていくからお得ってわけか》

《そうだね》

《いいな……羨ましい。俺もそういうの欲しいよ》

《欲しいからって僕を捕食しないようにね?》

《……心にとどめておきます……》

なにやらリムルの反応が少し遅れたことに対してイズクはすこしばかり恐怖を感じていた。

まさかね……という疑問がぬぐえないが、リムルもそこまで愚かではないだろうとい

ズクも納得していた。

「イズクー。私がリムルが変な動きをしない様に見張ってるね。そんなことはないと思うけど捕食されるのはヤダもんね」

『そうだね』

フオウともそんな会話をしながらも走るスピードは緩めないイズクであった。

そんな時にリムルがある事を聞いてくる。

《そういえばさ。今俺って結構暇を持て余しているからイズクにいくつか移動しながらも聞いておきたかったんだけど……》

《なにー?》

《さらっとだけど、イズクの過去は聞いたじゃん? でも、なんか気になるっていうか、なんだっけ? 『猫又の怪』だっけ? なんかそれ聞き覚えがあるんだよな》

《え? そうなの……?》

リムルの思わずの言葉にイズクは一瞬スピードが落ちるがすぐさまに元に戻る。

それでリムルに詳しく聞いていくと、

《なんか俺が死ぬ前にもそんな都市伝説がたまにテレビの特番とかでやっていたことがあつたんだよ……》

《それって……》

それでイズクは目を見張りながらもとある考えをしていた。
それから考えうる可能性としては、

【まさかリムルの世界はイズク達の世界の過去なのかな……?】

フオウのその予測にたいして、イズクが出した考えは『わからない』であった。

《俺はもうこうして転生してきちまったから元の世界に關してはどうも言えないんだけどさ。多分だけど俺の世界とイズクの世界は繋がってるんじゃないかなって……。

それを確かめるすべはいまのところ、他の異世界人と会おうくらいしかないと思うんだけど、多分だけどもイズクは時間軸事巻き戻してこの世界に転生してきたんじゃないかって思うんだ》

リムルの考えは案外的外れでもないかもしれない。

イズクとフオウは思わずその考えに賛同するかもしれないくらい説得力があった。

《フオウが『猫又の怪』で活躍していたのは超常が起きる前からだからあり得ない話じゃないのかな……? でも、だとするとリムルさんの世界はいずれ超常によつて生活が激変する未来が約束されているのか、はたまた超常は起きない並行世界という可能性も捨てきれないね》

《そうだな。まあ俺もイズクももうこうして前の世界とはもう関わりはないんだから本当にただの暇つぶしな考えだな》

《そうだね……いまはこれからをどうするか考えていけないといけないしね》

《だな。そう考えると俺達って結構運がいいのかもしれないな》

《というところ……?》

《だってさ。ヴェルドラでさえ俺のような転生をしたものは見たことがないって言っていたのに、すぐにイズクに出会えたんだからさ》

リムルのその多少気持ちが弾んでいるかのような言葉に、イズクも納得できたのか、

《この出会いにもなにかの縁があるのかもね。大事にしないとね》

《おう。そうだな》

そんな話をしていたら、フォウがイズクにとある話をしてきた。

「イズクー。なんかまた無意識なんだろうけど妖術でスキル『思念伝達』とスキル『分割思考』を覚えたみたいだよ。きつとリムルと会話をしながらも意識を割いて走っていたから最適化するかのようにはイズクが願ったんだね」

《えっ……なんか軽い感じに言っているけど相当なものじゃない?》

「イズクも自分で言っていたじゃない? その場その場で妖術は増やしていこうって……。なにごととも自分の発言には自覚を持たないとね♪」

どこか楽しそうなフォウの言葉にイズクは無意識とはいえそんなにポンポンとスキルを作ってよいものかと悩んでいた。

そして会話が途切れたのを不思議がってかりムルがまた会話をしてきて《どうした……?》って聞いてきたのでイズクは苦笑いを浮かべながらもさきほどのフォウが教えてくれた内容をリムルに話すと、《やっぱり羨ましい……》とこぼしていたとか。

なんかイズクって無意識とはいえ結構自分を最適化していくのに余念が尽きない性格なのかもしれないな。

無意識に『妖術』を使つて、新たに『思念伝達』に『分割思考』とか覚えて、なんていうか本当にその場その場で増やしているよなつて感じ。

生前の功績とかでここまで融通が効いてくると羨ましいを通り越して呆れてしまうかもしれない。

『妖術』と『無限成長』がいい具合に連動していて成長し続けるっていうのは、いったいどこまで成長するのか考えただけですわ恐ろしい……。

だつてさ？ 『妖術』を無意識に使つたつて事はその分の新たにスキルを覚えるための魔素も使用したわけだからさらに魔素量が増えたわけだろ？

大賢者。そこんところどうなってる？ イズクの魔素量はやっぱ増えてんの？

【解。 個体名：イズクの魔素量は使用分の魔素量のぶんが倍に膨れ上がりもとの魔素量に足されました】

やっぱなあ……。

イズクは確実に総合的に強くなっていつている。

生前の経験もあるから戦闘経験値に関しても事欠かさないだろうし、ホントどうなつてんの？ この娘……。

これであとは身体的成長も全盛期になれば向かうところ敵なしなんじゃね？

イズクと会話する前にリグルと話していた魔王とやらとも張り合えるくらいになつたらすごいよなあ……。

そんな事を思っていた時であった。

「我が主イズク！ そろそろ夜も更けてまいりました。ここいらで休憩と野営の準備をいたしましょう」

「わかった！」

ランガがそう言つてイズクの事を止めていた。

うん。休憩もいいよね。

それに明日はイズクをランガに乗せて休ませるか。別に急激な成長速度が怖いって訳ではないぞ？うん。

その夜の事であった。

ドワーフ王国に行ったことがあるというゴブタにどういう国なのか聞いてみたら、

「はい！ええつとですね。ドワーフ王国は正式名としましては『武装国家ドワルゴン』っていうつす」

なんでも天然の大洞窟を改造した美のある都らしい。

それに聞くとドワーフ以外にも人間……そしてなんとエルフとかもいるって話じゃないか！

俄然やる気が出てきた。

でも、そんな俺の考えが見透かされていたのかイズクが、

「リムルさん。顔がにやけている気がするよ……？スライム顔だからよくわからないけど……」

「そ、そんなことないよー？それより俺達魔物がそんなところに入っても大丈夫なのか？」

「そこは心配いりません。ドワルゴンは中立の自由貿易国家……ですので王国内での争

いは王の名に於いて禁じられています」

リグルの会話を聞きながらもエルフの事を考えていたが、次の言葉である『噂ではこの千年、ドワーフ王率いる軍は不敗を誇っている』という内容に目が飛び出そうになった。

それはイズクも同様のようで、

「そんなに不敗を保っているのはすごいね。相当の実力者だらけなんだね」

「おそらくですが……それだけの権力も持ち合わせていますので陥落は絶対とは言いませんがしないでしょう」

「だろうね」

それでうんうんと頷いているイズク。

多分だけどの程度の戦力があるのか考えているのかなって俺は感じた。

イズクって治癒という能力があるけど、その反面能力的に前線部隊タイプだもん
なー。

「それじゃとにかく、こちらから手を出さなければ大丈夫かな？」

「ええ。トラブルなんて起きませんよ」

と、リグルが言い切っているよそれに、ゴブタが小さい声で「前に行った時は門の前で絡まれた」というのは聞き逃さなかったぞ。

「ゴブタ君。それはフラグだよ」

「フラグ……？ それってなんすか？ イズク様？」

「あつ……えつと、あはは。聞かなかつたことにしておいて」

イズクは正直だなあ。

まあ俺も脳内でツッコミは入れていたけど。

このフラグが回収されない事を切に祈りたいものだね……。

まあ、こういう時に限って効果は発揮するというのがフラグだから今のうちに諦めておくのもいいかもな。

そして一同はもう一走りして丸三日経過してようやく武装国家ドワルゴンの洞窟がある山脈へと到着したのであった。

NO. 011 外伝・ヴェルドラの観察日記1

我は暴風竜ヴェルドラ。

世界に四種しかいない竜の一種である。

色々と巡り合わせがあり、いまはこうしてリムルと友達になり、盟友となっておる。リムルが我が封印されていた洞窟を出た後にゴブリン達の願いに応えて「守つてやる！」と答えたところまでは良かったともいうな。

そこにふらりとやってきた獣人がきてから我の勘が何やら悲鳴をあげだしおつた。ただの獣人になにを怯える事がある？と我の本意がそう語つておつたが、なんだ？この小娘から出ておる聖なる気配は!?

まるであの時の勇者を彷彿とさせるほどのものではないか！

リムルはリムルでこの小娘の気配にあんまり気づいていないのか呑気に、

「猫娘!? かあいいいな……」

とかほざいておる。

誰か私のこの気持ちを代弁してくれないであろうか。

なんというか……この小娘、魔素量がかなりあると思うのだが……。

いまのリムルを上回っているのは確かだな。

我を取り込んで魔素量がえげつなくなっているはずのリムルにせまるものがあるというのはほんだけであろうか？

それほどに我はこの小娘の事を警戒している。

はたして敵か？それとも味方か？

おそらくだが今のままであったらリムルは負けてしまうかもしれないと、我にしてもありえない感想だが浮かんできよる。

それで我は一人警戒していたのだが、

リムルはやはり大胆な性格なのだろう、

「俺、スライムのリムル。悪いスライムじゃないよ？」

と、普通に自己紹介をしておった。

するとその小娘はすぐに笑みを浮かべていた。

ふむ？ どうやらリムルの反応がよかったのか、小娘とはすぐに打ち解けたようだな。
な。

リムルもそれですぐに仲間になってほしそうな感情が窺い知れるが、我としてはまだ

警戒態勢をしようとするか。

なにもできないのが口惜しい。

そしてその小娘は言った。

『まだこの世界では名前を持っていない』

『いまはイズクと名乗ってる』

と。

意味合いとしては正しいが、自分で名を名乗るとするのはこの世界の魔物にしては珍しいのではないか？

正式な名ではないらしいが、それはすでに名付けの範囲だと思うのだが。

まあ、名乗っているだけならまだ力は上がっていないだろうよ。

それでもだ。

正式な名はないというのに、我が見ただけですでにこれほどの力を内包しているというのはいすごいことであるな。

それからリムルとイズクはゴブリン達に村を案内されていき、そこで怪我人だけが寝かされているテントに案内されて、リムルは事前に洞窟で作っていたのか回復薬を

使つて一匹のゴブリンを完全回復させていた。

すごい効果であるな。

おそらくこれはハイポーションではなく、フルポーションに近いものではないか？
さすがリムルだな。

しかし、次の瞬間にはまたこの小娘イズクに驚かされた。

リムルの薬と同等の治癒スキルで幾人もの怪我人の傷を瞬く間に塞ぎ追つた。

それだけではない。

私の勘違いでなければ治癒のスキルを使うために使用したであろう魔素が減るどころか逆に増えておる。

これはどういうことであるか？

特殊なスキルを持つているという事なのか？

私の探求心が妙に騒ぎおる。

この小娘のスキルの事を知りたいと……。

それからリムルが先導して村の家に使われていた木材で柵を作つて粘性や鋼製の糸などを使い、迎撃態勢を整えていく光景を見せられて、なるほど……こういう風にして

リムルだけが戦わずにゴブリン達にも戦わせるといふ事か。

リムルならおそらくは本気を出せばただの狼共などすぐに殲滅できようものぞ。

リムルは策士でもあるのだな。

しかし、いざ狼共が攻めてきたときには最初はうまくいっていたが、少ししてゴブリン共の悲鳴が聞こえてきてリムルは焦り出す。

どうやら別働隊がいたようであるな。

だが、それもあの小娘のおかげなのかなにやらひと際大きい叫び声が聞こえてくるとあちらの方で動いていた気配が一斉に途絶え追った。

殺してはいないのだろうか、それでも無力化したのであろう。

リムルもリムルで狼共のボスを打ち倒し、さらにはボスを吸収して擬態して威圧を放ち、てつきり逃げ出すものと思われた残りの狼共はなんとリムルに服従してしまった。

まこと魔物はこういう時は強き者に従うという習性があるが、うまいこと事が運んだようではなかったものだ。

しかし、その後になにやら小娘によってリムルはスキルの使用を制限されてしまった。

むー……なにやら面白くない展開であるな。

スキルは使ってこそそのものなのに、あまり使うなというのはこれ如何に？

我としてもこの小娘に不満を感じ始めたぞ。

そう思っていた時も我にはあつた。

その夜中の時にまた小娘がやってきて今度は何を話すと思つたら、なんとリムルに謝罪をしてきたではないか。

どのような心変わりをしたのかは知らないが、先ほどの発言も撤回してスキルも自由に使つて構わないという。

なんぞ変化があつたのか俄然我も興味が湧いてきた。

それでリムルは小娘にとあることを聞いた。

「でも。なんかイズクって年上な感じがするよな。ちよつと活発だけど冷静だし、牙狼族の奇襲も読んでいたみたいだし」

「まあ。生前の勤つて奴かな」

「生前？ つてことはやっぱりイズクも！」

「ということはやっぱりリムルさんも？」

「転生者!!」

というやり取りを聞いていた我はさらに驚いた。

まさかこの小娘も異世界からの転生者だったとは。

こうも目新しい出来事が連続で続くと我も驚愕ものよ。

しかも、リムルとの会話に微妙なズレが生じているのを不思議がつてリムルは小娘の世界について聞いていくとなんとまたしても面白いことが判明しおった。

なんと、リムルとは違う世界の出身らしく、世界総人口の8割が我らのスキルとは別物である『個性』と呼ばれるものを宿していてヒーローとヴィランに分かれて活動しているという不思議な世界であった。

その中でこの小娘……いや、もうイズクでよいか。

イズクの生い立ちを聞いていくうちに我も少し感傷に耽る気持ちになっていた。

無個性として生まれてしまい、社会から孤立しがちだったというが、フォウという猫と出会う事によってイズクの運命は一気に変化し、オールマイトという大物との出会いで個性を開花させてヒーロー社会に羽ばたいていく。

そしてフォウという猫の業とともに背負い、生涯を捧げて人助けを続けて天寿を全うしたと思ったら……この世界にもともと持っていた個性に、友人達からもらった個性も世界の言葉で統廃合されて、数々の強力なスキルとなつていまのイズクが出来上がったという……。

それを聞いた私の感想は、一言でいうとすごいというしかなかった。

そして実感した。

イズクが放つ聖なる気配の正体を……。

これは生前の功績がその身に宿っているという事なのだな。

我、納得。

さらにはその中でも強力なスキルなのがスキルを新たに増やすことができる『妖術』に、イズクが成す事すべてに適応される無限に成長できるスキル『無限成長』。

え、なにそれ羨ましい……。

下手すると無限に魔素量も増やせるとかいうものではないか！

なんてえげつないスキルを持つておるのだ！

さつきに魔素が増えたのはこれが原因だったのか。

さらにはこの我をしても未知数であるスキル『仙術』。

私の予測では『治癒者（イヤスモノ）』として変化したフォウが教えてくれた使用方法以外にもとてつもない力を秘めているに違いない。

まだ名無しでこの状態なのだぞ？

もし、名前を得てしまったらどんな事が起きる事か……。

と、思っていたら突然の虚脱感！

リムル、もしや貴様!?

思った通りリムルはゴブリン達に名付けをしておる。

名付けというのはとても大変な行為なのだぞ!?

しかも我からも勝手に魔素をぶんどっておる。

それでなんとかそれを阻止しようと思って努力していたが、リムルの動きは止まらな
い。

それでおそらく牙狼族の息子に名付けをしようとしている時であった。

イズクがある提案をしてきた。

その内容とはイズクの魔素をリムルに渡すというもの。

え? それって名付け以上に自殺行為なのではないか?

いや、そうだ。『無限成長』でさらに倍になるのであった!

そこも計算しての発言か!

リムルもそれでお構いなく魔素を受け取っているし。

リムルの魔素も全快したし、魔素の上限も上がったので良かったことであろう。

しかし、そこでただならぬことが起きおった。

なんと!

我にまで作用したようで私の魔素も少し回復したただけならまだしも、リムルと我とな
にかしらの接続をしてしまい、リムルと同格の存在になりおった!?

いかん。いかんぞリムル。

こやつ成長はなぜかはしらんが将来的にマジで危険かもしれない！

と思つたらリムルはイズクに正式に『イズク』という名を与えた瞬間であつた。

さつき回復したはずのリムルの魔素量が一気に全部持つていかれてスリープモードにまで追い込まれておつた。

我も思わず意識を失うかと思つたわ。

イズクめ。こやつ本当にとんでもないぞ……。

さきほどのランガに使用した魔素量を比ではなかつた。

我のも含めてその5倍くらい持つていきおつた。

これはとんでもない進化をするぞ。

イズクの行動には今後も静観していかんとな。

それからリムル達はドワーフの国に向かうみたいだが、なにやら面白そうなものがありそうだな。楽しそうであるな。

NO. 012 門の前での騒動

イズク達はやっとの事、ドワーフ王国がある山脈にたどり着いた。

「やっと到着で来たね……」

「そうだね。イズクも今日はランガに乗っていたから楽だったろ？」

「うん。ありがとね、ランガ」

「はっ！ 我が主イズク！」

イズクはランガの毛皮をさすりながらもランガの事を褒めていて、ランガもランガでまんざらでもないのか尻尾をぶんぶんと振り回していた。

そして山脈にある大きな門……その隣に人が数人か通れる小さい門があり、そこを通行人が並んで次々と審査を受けつつも中に入っていく光景を見て、リムルは今この場に
いる全員でいくのは逆に迷惑がかかるだろうと思ひ、

「リグル君」

「はい。なんででしょうか、リムル様？」

「うん。ここからは俺とイズク……それと案内役のゴブタ君だけで行こうと思う」

「えっ……しかし、大丈夫でしょうか？ リムル様とイズク様の實力であれば害意に晒されることはあるとは思えませんが……ゴブタ一人だけで大丈夫ですか？」

「まあ、そうですね……」

それで少し考え込んでいるリムルをよそにイズクがゴブタの肩に手を置きながらも、
「それじゃゴブタ君の事は僕が守るね」

「イズク様！ いいんつすか!？」

「うん。つい先日の夜に前に絡まれたとか言っていたでしょ？ また弱い魔物だと見られて絡まれるかもわからないしね」

「ありがとうございますっす！」

ゴブタはもうイズクとの会話も緊張せずに話をしているようである。

これでイズクが全盛期であるしっかりと成長して出るとこは出ていたらゴブタも別の意味で緊張をしていたかもしれない。

それにイズク自身もどこかゴブタの事がどうにも生前の友である峰田のように見えて仕方がなくつつい守ってやりたいなという気持ちにさせられてしまっていた。

【なんか峰田君みを感じるよね】

『そうだね、フオウ。まあエツチ過ぎないのがゴブタ君の方が良心的だね』

そんな会話をしているイズクとフオウ。

それでリムルもイズクの言い分を承諾したのか、

「わかった！ イズク。ゴブタ君の事をお願いね！」

「了解だよ」

「それじゃお前らはここで野宿していてくれ」

「わかりました！ お早いお帰りを！」

「いつてらつしやいませ。我が主達！」

リグルやランガ達に見送られながらもイズク、リムル、ゴブタの三人は門へと向かっていった。

門へと向かいながらも、

「それにしても、やつぱり近寄っていくとその大きさに圧倒されるよね」

「だなー。こんな洞窟に一国を築いているなんて、よっぽど堅牢な砦なんだろうな」

「そうっすね。中もすごいつすよ。普通に人間が十年働いても買えないくらいの武器・

防具とか売ってますから」

ゴブタのその発言に、リムルとイズクはやはりここでどうしても人材確保を成功しないとな息巻いていた。

そんな事を思いつつ、列に並んでいたのだが、やはりゴブタのフラグは回収されるも

のだと神が言っているかのようにな、

「おいおい。魔物がこんなところにいるぜ?」

「まだ中じやねーからここで殺してもいいんじゃないやね? それになんか可愛い獣人もいるし、そいつも魔物の奴隷にでもしちまうか?」

「そうだな。おい、お前ら。荷物を置いて行けよ。それで見逃してやる」

と、どこぞのテンプレのような三下のような二人組にそう言っただけでイズク達は絡まれてしまった。

なんか、とつてもやられ役のようなことを言っている二人組に絡まれちゃった。

こういうのって厄介な奴らなんだよね。

どこかのファンタジー小説とかだとかこういう奴らは痛い目を見ないと何度でも復活してきてなにかしらの邪魔をしてるのがセオリーだからな。

しょうがない。

「イズク。ゴブタの事は頼むぞ?」

「うん。別にいいけど……やりすぎないようにね？」

「了解つと。おおい、ゴブタ君……前に教えたルール3は覚えているね？」

「はいっす！『人間は襲わない』！」

「それじゃ少しばかり目を瞑って耳をふさいでおいてくれ」

「……？ よくわかんないっすけど、了解つす！」

それでゴブタが地面に顔を付けて目を耳をふさいでいるのを確認する。

イズクは苦笑いを浮かべているけど、まあいいんじゃないか？

ルールを決めた俺が真っ先にルール違反をすると、部下に見せる訳にもいかんっしょ？

だけど、それで無視されているのを気に障ったのか、

「おい！ 雑魚い魔物のくせにこっちのこと無視してんじゃないよ！」

「雑魚……？ それは俺達のことか？」

「てめーらに決まってるだろ！ 獣人はわからんが、スライムなんか雑魚ちゅうの雑魚だろ！ 言葉を喋るのは珍しいけどな」

「おいおい。それじゃとっ捕まえて商人に言葉を喋るスライムって言って売り飛ばすのもいいんじゃないか？」

「違いねー！ ついでにそちらの獣人の小娘も一緒に売っちゃおうぜ！」

あ……？別に俺の事はどうでもいいけど、イズクを、どうするって……？

いまは抑えて抑えて……、

「おいおまえら！今のうちに引くならさっさきの発言も忘れて許してやるからさっさと順番を守って列に並んだらどうだ？」

「あっ!？」

よし。挑発にかかった。

すぐに激昂するところが程度が知れているな。

「雑魚のくせになめやがって！俺達を怒らせやがったな!？」

「ここから生きて帰れると思うなよ!？」

と、またしても下つ端のような発言を繰り返す冒険者達。

うんうん。普通に上位の存在とあまり戦ったことがない事が伺える。

普通に人語を喋るスライムとか普通なら警戒するくらいする筈なのにそんな素振りすら見せないでいる。

察するに、ここで並んでいる魔物からしかせびつたりできない弱いパーティーなのだろう。

後ろの方で三人くらい控えているような感じだし俺の予想はそんなに外れていないとも思うし。

仕方がない。

もうちよいこちらが優位になる様に挑発を繰り返すか。

「雑魚雑魚って……俺がそんなに雑魚く見えるのか?」

「雑魚だろうが! スライムなんて底辺の魔物だろ!!」

「ほうほう……俺がただのスライムに見える……」

「その通りだろうが! なめやがつて……もう生きて帰らせねーぞ!」

そう言つて二人とも武器を抜いちやつた。抜いちやつたか……。

これでもう俺達の方に幾分は分があるな。

遠目で見っていた他の人間たちも巻き込まれたくないと我先にこの場から離れている。

イズクは……欠伸をしている。くそー、俺が頑張っているのに余裕だな。

それでもなにかの予備動作なのか片手を掲げている。

俺が交渉に失敗した時になにかするつもりなのか……?

「ククク……俺がただのスライムだと。いつから俺がただのスライムだと錯覚していた

のかね?」

某死神のラスボス級みたいな発言で煽る煽る。

「ただのスライムのくせにえらそうに!」

「その姿が偽物だつてんなら正体を見せやがれ!」

「いいだろう……！　見せてやる！」

それで俺は擬態を発動して嵐牙狼族に変化する。

でも、あれ？　なんか角が一本増えてね？

調べてみると、どうにも『黒嵐星狼（テンペスターウルフ）』というランガの上位種に変化していた。

いまはいろいろと考察は後にして、

「どうだ？　これが俺の本当の姿だ」

ウソだけ。

だけどこれですこしは怯えてくれるんじゃないか？

なんか黒稲妻とか使えるスキルが増えていて、こんななん使ったらあたり周辺が黒焦げになっちゃうから威圧だけでなんとかするしかないな。

だけど、やつらはバカだったらいい。

「はったりしろ！　見た目だけ敵つくしてもスライムなのには変わらないだろうが！」

「お前らも来い！　全員でやるぞ！」

そう言っつて残りの仲間も呼び寄せてしまうバカ達。

おいおい。普通……こんな大きい魔物に変化するスライムってだけで事案だろう。

それでも攻撃をしかけてくるって……こいつら本当にただのバカなのかもしれない。

それで何度も攻撃を受けてもダメージは受けないけどうざったくなくてきたので、威圧をしようとしたその時であった。

『告！ その場で跪き頭を垂れなさい』!!」

なぜかイズクのそんな叫び声とともにバカ共は顔を青くして武器を手放して本当に頭を垂れてしまっていた。

っていうか、あつぶねえー。思わず俺も従いそうになるところだった！

大賢者が「告。レジストに成功しました」と言っているけど今回だけはナイスだ！

見れば周りで見ていた人達も同じように頭を垂れて体を震わせていた。

これはイズクのスキルである『全言語理解&服従』か！

こんな使い方もできるなんて……イズク。恐ろしい子！

思わず紅バラ顔になりそうだよ。

そんなイズクはというと呑気な顔をしつつ、

「ふう……これでよかったかな？ あのままだったらリムルさん、暴発していたかもだし……」

「なにもいえねえ……」

今後、イズクがキレたらこういう事も平気でしてくるって事を肝に銘じておかないとな。

「おい！ お前たち、なにをやつてんだ!?」

と、門番達が俺達に突撃してきていた。

うん……。

こればかりは言い訳できないね。

被害は最小限とはいえバカども含めて全員あの場で跪いちまつてるし……。

俺はすぐさまにスライムの姿に戻ったけど、なんかそれでも門番達は警戒していて、特にイズクに驚愕の目を向けている。

おそらくバカどもは気づかなかったようだけどイズクの聖なる気配にも気づいたの
だろう。

「……とりあえず大人しく連行されてください」

「わかりました」

「はい。ゴブタ君、いくよ」

「? 終わったんっすか?」

イズクにそう促されてようやくゴブタも気づいたのか立ち上がった。

さつきまでの騒動を本当に最後まで約束を守って聞いてなかったゴブタが一番の大
物なのかもしれない……。

連行されながらも俺はそう思ったのであった。

NO. 013 詰め所にて

イズクは絶賛リムルに白い目を向けていた。

事を遡る事、警備隊の詰め所に連行されて、リムルが中心になって言い訳をしている場面までの事である。

見ていた人達も含めてリムルは、

『実は自分は魔法少女なんですけど悪い魔法使いにスライムの姿に変えられてしまつて変身も練習中でさっきの姿はその一つだということですよ』

とか、嘘に嘘を重ねたカバーストーリーをでっち上げていた。

それでそのホラ話を聞いていた警備隊の『カイドウ』ももうめんどくさくなつたためにそれでリムルについては報告書を出そうとしていた。

それで聞いていたイズクはリムルに白い眼を向けているのであった。

「リムルもあとが怖い話をしているよねー。世渡り上手なのか怖いもの知らずなのか」

『まあ、この場を凌げればいい事だし……僕達はどうしよっか。素直にスキルの一つですと言つても信じてもらえるかな？』

「リムルと同じでなんとかごまかしたら？ イズクは見た目だけだったらただの獣人でしかないんだし、ちよつとした服従の発声ができるとかで」

『そうだね』

それでいこうと思っていた時であった。

「それで、次はお嬢ちゃんの方だが……あれはなにかのスキルかね？ 獣人だつ

たらなにか特殊なスキルを持っていても不思議じゃねーからな」

「え？ そうなんですか……？」

「ん？ 知らないのか？ もしかしてお嬢ちゃんは『ユーラザニア』出身じゃねーのか？」

「その……ユーラザニアってどこかの国ですか？」

「その様子だと本当に知らないようだな。ユーラザニアってのは獣人の民で構成されていて、そしてこの世界に十人しかいない魔王の一人が統治している国だ」

「魔王……」

それを聞いてイズクはというと、

『なんか、思いもしないところでこの世界の情報が手に入ったね』

『そうだね。覚えておいて損はないかもしれないよ』

そう話し合っていた。

「まあ、服従系の叫びかなんかか？ 跪いちまった商人とかに聞いた話だと脳に直接語りかけてきたみたいだって話だしな」

「えつと……まあそんなところですよ」

実際はもつと使い方によれば凶悪な性能なのだが、ここで話す事ではないだろうとい
ズクはそれで通すことにした。

それでカイドウは報告書を書いているようで手間が省けたなど思っていた時に他の
警備員の人が青い顔をしながらカイドウの場所まで走ってきて、

「隊長！ 大変だ！ 鉱山でアーマーサウルスが出て、鉱山夫達が何名か傷を負ったら
しつ」

「なんだと!? それじゃ討伐隊を手配しねえと!」

「そこは大丈夫です! いま、討伐隊が向かいましたから。だけど怪我人の傷が思った
以上にひどい……いま回復薬は戦争の準備で品薄になっちゃってほとんどないんだ
……」

「回復術師はいないのか……?」

「それが鉱山夫にほとんど着いていつちまって、ひよつこしか残っていない……このま
まだと命も危ういかも知んねえ」

「なんだとお……ガラム達は俺の家族も同然だ。そう簡単にくたばらせてたまるものか

「！」

それを牢屋の中で聞いていたリムル達というと、

「なんか空気だな」

「つすね」

「回復術師なら僕もいるけど、どうする……?」

「いや、でも今はイズクの驚異的な治癒能力を見られたらどこに連れてかれるか分かったもんじゃない」

「それに関しては僕も同意かも。それじゃどうする……? 僕的にはバレてもいいから行きたいところだけど。でないと生前じゃないけどヒーローじゃないし……」

「イズクの気持ちは俺も分かるからなあ。しゃーない。おい、旦那! ちょっといいか?」

「あ?なんだ? いま、お前たちに構っている暇はねえんだ!」

「まあまあ。そう言わずに」

それでいままなお血相を変えて話をしているカイドウにリムルは話しかけて、先ほどまでリムルがスライムだからと詰められていた樽の中にリムルが作成した回復薬をなみなみとたらふく入れて、

「これ。回復薬だ。これくらいあれば足りるんじゃないか?」

「足りるかって……そもそもこれ、どこから出したんだ……う？」

「いまは時間があまりないんだろ？ 騙されたと思って使ってみてよ」

「お、おう。お前からここから出るなよ!？」

そう言つてカイドウは回復薬の入った樽を仲間と一緒に担いで走つていった。

それを見送りながらも、リムルはそろそろ聞かれるかなと思いつつ身構えていた。

「リムルさん。前は教えてくれなかったけど、さっきの回復薬つてどうやって作ったのか教えてもらえない？」

「別にいいよ。まあぶっちゃけ裏技にも近いんだけどな」

それでリムルはイズクに話していく。

ちなみにゴブタはもう退屈になっていたのかすでに居眠りを始めていて、リムルはあの意味ちようどいいかとも思つていた。

リムルさんの話を聞いて、大賢者つてすごい性能なんだなと改めて実感できたかもしれない。

もともとヴェルドラさんのいたという魔素濃度が高い洞窟で暇つぶしに捕食していたという薬草。

それを大賢者が解析、作成して回復薬を生成したという。

「そんなこと、フオウでもできないと思うな」

「うん。私もいまの状態が現状でいっぱいだからそこまで知識や技能はできないかな」

「まあ、大賢者様様だな。俺もいろいろと助かってんだ。大賢者がいなくちゃきつとにもできないって言っても過言じゃないよ」

「そっか……そんなにすごいスキルなんだね。他にはなにができたりするの?」

思わず興味本心で聞いてみたけど、リムルさんはすこしうなりながらも、

「どこまで出来るのかは分からないなあ……聞かないと教えてくれないところが結構あるし。ただ、知識に関してはこの世界ではたぶん一番の性能なんじゃないかなと……わからんけど。そういうイズクだって『妖術』や『仙術』とかやろうと思えばなんでもできるスキル持つてんじゃん」

「まあ、確かに……」

僕もぶっちゃけ人の事をとにかく言えない力を持っているんだよね。

特に八百万さんの個性『創造』も引き継いでいるから想像力を膨らませればなんでも

作れてしまうかもしれない。

「お互い……身に余る力を持っているよね」

「違ういな。ま、落ち着いたらいろいろと試していけばいいじゃないか」

「そうだね」

そんな会話をしつつ僕達はカイドウさんが戻ってくるまで他愛ない会話をしつつ、リムルさんはスキルの系でなにかの塔を作っていた。

なんかどこかで見えたことがあるような感じだ。

「これってもしかして……」

「リムルさん。それってもしかして『東京タワー』ってやつ?」

「ん? そうだよ。ってイズク達の世界にもあったのか?」

「うん。あったって記録だけは残っていたよ。過去の遺物扱いになっていたけどね」

「過去の遺物って……それってやっぱ超常が起きた後に暴動とかで壊されちゃったのか

……?」

「そこらへんはどうかは分からないけど……個性が出現してから文明は少しの間荒廃したらしいからね」

「荒廃、ね……相当カオスな世界になってたんだな」

「そりゃね。人という規格が一気に壊れたと言っても過言じゃない出来事だから、オリ

ンピックも公平を保てなくなつて形骸化したらしいから」

学校で習つたことだからあながち間違つていないと思う。

「オリンピックもか？　なんで……？」

「たとえば、僕の友達だった人に足にエンジンが付いた人とかいたんだけど、その人が普通の人と一緒に走つたらどうなると思う……？」

「ただの人なんかすぐに置いてかれちゃうな……なるほど。曖昧にだけど理解できた。個性つて身体機能の一部でもあつたんだな」

「うん。だからどうしても個性だよりになつちやうからまともに競技でなんて競えないし、それで法整備とかもかなり面倒になつて、僕の生きた時代にはやつこのこと新世界での法律とかも出来上がつていたんだ」

「なるほど……」

イズクの話をつくつも聞いていて話題が尽きないのが面白いところなんだよな。

たとえば他にもどんな個性があったとかだというと特に惹かれたのが個性『東映』。

かのゴ○ラの姿にもなれる力らしく、面白れえ!と思いつつ、確かにそんな世界じゃ新たに法律なんてゼロから作らないとやってられないよな。

他にも『仮○ライ○ー』とか『ウル○ラ○ン』とかいろいろ調べればあったかもしれないとおもうと、本当にアメコミの世界のようで、その実現実がありその人よつて違う個性で苦しみとかもあつたんだなと考えられる。

新法律で縛られてしまい、その窮屈な世の中で個性ゆえにうまく生きていけないものはみ出し者として白い目で見られてしまい、やがて法を犯してヴィランになってしまうというのはよくある話らしい。

他にもヒーローになるにも資格があつて、それを取らないで個性を無許可に使用して活動しているものは『ヴィジランテ』と呼ばれて良い事してもお尋ね者扱いだとか……。

「うへえ……そう聞くとホントにシビアな世界だな」

「そうでしょ? 僕達はそう子供のころから習つてきたから別段苦じゃなかったけど、それでも苦しんでいる人はたくさんいたと思う……」

それでイズクの顔はまだ子供なのにどこか哀愁が見て取れた。

イズクももとは無個性だったというから相当苦しい人生を送っていたんだなと思うと目頭が熱くなってくるようだ。

そんな話をしていた間に結構時間がたっていたのか、カイドウが後ろに三人くらいの男達を連れて帰ってきた。

「助かった。ありがとう！」

そう言つてカイドウは感謝の言葉を言つてくれた。

「どうやら回復薬は役に立ったようだな。」

「あんたがくれた薬じゃなきゃいまごろ死んでたかもしれない。ありがとう！」

「今でも信じられんけど千切れかけていた腕が何事もなく繋がつて治つたんだ。目を疑つたよ」

「……………(くくくくく)」

おい。最後の奴、頷くのはわかつたけどなんか言えよ。感謝されているのはわかるからいいけど。

それで男たちは感謝の言葉を何度もいいながら帰つていつて、それから少しして俺達もカイドウに気に入られたみたいで、そんなカイドウの計らいで翌日には釈放された。

よし！ これで自由に動けるな！

頑張らないとな。

NO. 014 鍛冶職人

リムルとイズクはなぜかいい鍛冶師を紹介するという事の代わりに昨日に与えた回復薬を売ってくれないかとカイドウに頼まれていて、まだこの世界でどの程度の価値があるのかわからないためにあまり気乗りはしなかったのだが、お金になるという意味でカイドウの話す通りに交渉が成立して、いくつか回復薬を譲っていたのであった。

「代わりにいい感じにこの世界の流通の流れとか教えてくれませんか？ なんせただのスライムなんでわからないもので」

「いいっすけど……」

そんな話をしているリムルにイズクはこっそりと思念伝達をして話しかける。

《リムルさん、話は聞くのはいいけど……自分で作った設定をもののみごとに否定しているけど、いいの……？》

《いいって。それにこの世界の常識が知れる機会なんていつ訪れるか分からないんだからこの際聞いておくのもいいんじゃないか？》

《まあ……そうだね》

それでイズクもなんとか納得していた。

確かに情報は力である。

それがなければこの先上手く立ち回りも出来なくて立ち止まってしまう。

停滞はある意味次の考えをすることができないのでかなり危ない。

それならこの場で常識を身に着けてもいいのではないか？

そう、納得し、イズクとリムルはカイドウとの話し合いが続けられていった。

そして久しぶりにまともな食事を出してもらえたのでイズクとしては多少はマシになったと実感しながらも大事に頑張っていた。

しかし、そんなイズクの食事風景を見ていたリムルとカイドウ、ゴブタはというと、

「なんか……イズクの嬢ちゃんのおいっぷりは癒されますね」

「そうだろう！ 今まで丸焼きしか食べてなかったから新しい味に飢えてんだろ。俺も味覚があればなあ……」

「イズク様、可愛いっす！」

「ふえっ？」

やはり無自覚に多人数を一気に魅了をしていく体質は生前も含めて治らないものである。

さらにスキルの効果でおそらく威力が倍になっていることから、これからイズクはもし自覚して魅了をしていくと大変な事になるだろう。

……まあ、イズクに限ってそんな事はおそらく起こらないのだろうか……。

それでも、生前に『施しの英雄』とまで言われていたほどにイズクは無自覚ではあるがカリスマを備えている事が伺えるものである。

ドワルゴンに入る前に発した服従スキルも吟味して、言葉一つでいくつもの集団が統制された軍隊の様に動くさまを想像したりリムルはというと、そんなイズクに対して出した感想が、

『これからイズクの手綱もしつかりと握っていかないと大変な事になるぞ』

と、すでにイズクが出しているその可能性の片鱗を垣間見て戦々恐々としているのであった。

そのリムルの想像が実現するのはそう遠くない未来かもしれない……。

うん。

カイドウの紹介でその鍛冶師がいる場所に向かっているんだけど、町の中を案内されている間に中を魔力感知で見える事を繰り返しているけど、やっぱりゴブリンの村と違って文明的だな！

だされた食事美味わって（味は分からないけど）分かったけど、文明レベルが違いすぎる。

イズクが美味しそうに頬張っていたのがいい証拠だ。

おそらく久しぶりに人間味のある食事でありつけたんだろうな……。

今まで動物の丸焼きか干したものでばかりだったからな。

やっぱり味覚、欲しいよな。俺も美味しいものを食べたい！

そんな事をイズクに両手で担がれながらも思っていた。

え……？なんで自分で移動しないのだった？

なんか見た目的にイズクが俺を持っていた方が見栄えがいいんじゃないかって……。獣人の女の子に持たれているスライム……。

確かに見栄えはいいかもな。

「リムルの旦那。イズクの嬢ちゃん。それにゴブリンの坊主。ここが俺が案内する鍛冶師がいる場所だ」

「おー！ ここか！」

なんか飾られている武器もなんか薄く光ってるし！

ここならなんかいい予感がするぞ。直感だけど。

「カイドウさん、ありがとうございます」

「へへ。いいってことよ。それよりここからは旦那の番ですからね」

「おう！ しつかりと交渉して見せるさ！」

イズクが礼儀正しくカイドウに俺を落とさない様にお辞儀をしていて、やっぱり根はいい子なんだよなあ……と思う。

それより、よっし！うまく事を運べるように頑張らないとな！

「今呼んできますんで……おい、兄貴！いるか？」

カイドウが中に入っていたので俺達も続いて中に入らせてもらう。

「お邪魔します！」

「お邪魔します」

「入るっす！」

と、中に入ってみたはいいんだけど中には昨日の三人の姿があった。

あいつら、ここで働いていたんだな。

あちらもこっちに気づいたようで「あ！」という顔になっていた。

うんうん。こういうところで縁というのは結ばれていくもんだよな。

「あ？　なんだお前ら、知り合いか？　獣人の嬢ちゃんにスライムにゴブリン……また変な組み合わせだな」

それから三人がカイドウの兄の鍛冶職人のカイジンに俺達の事を説明してくれていた。

こういう時に顔が効くと助かるよな。

カイドウさんの人の好きで兄のカイジンさんという人も反応してくれたけど、どうにも顔色が悪そうだなあ。

どうしたんだろう？

僕達が来る前にもなにかの作業をしていたみたいだし、邪魔しちやつてるかな？

「すまん。こいつらの恩人なのに今は手が離せなくてな」

「いえ、大丈夫です。それよりなにかお困りですか？」

僕の仙術があればなにか手伝えることがあるかもしれないし、聞いてみるだけ聞いておきたいしね。

そこにあの三人がカイジンさんに、「リムルの旦那達に相談してみないですか？」と話している。

それで少し揉めているけど、リムルさんが、

「話してみてくださいないか？」

と促していて、それでカイジンさんは今悩んでいるであろう事情を話していく。

内容によると、今週までにロングソードを20本納品しないとイケないらしい。

しかもただの鋼の剣じゃなくて、『魔鉱石』という特殊な鉱石で作られた使用者の意思で成長するという剣を作らないといけならしいんだけど、まだ一本も作れていないらしい……。

なんでも作ろうにも材料がなくて作るに作れないみたい。

うーん……それは大変だ。

カイドウさんも断ればよかったじゃないか。と言っているけど、どうにもカイジンさんを失職させたいらしいベスターという大臣が王様の前でわざわざカイジンさんを煽ったらしく、断るにも引けなくなってしまうらしい。

そのベスターっていう人、性格が悪そうだなあ……。

それで事情も聴き終えて、どうするかという話なんだけど、どうにもみなさんはリムルさんをあてにしているらしい。

やっぱり昨日の回復薬で普通のスライムじゃないと見られていて、どうにかできるんじゃないかなという感じか。

《リムルさん。どうするの？ なにかあてはある？ その、洞窟で薬草を食べていたんだよな？ もしかして鉱石とかも食っていたり……？》

《イズクは勘がいいな。まあ、食っていたさ。俺の力でどうにかできるかもしれない。でも、捕食する剣が一本もないとあっちゃどうしようもないしな》

《それなら鉱石を渡して一本だけ作らせてみて、それを捕食して複製とかできるかな？》
《まったく》

それでリムルさんとの思念伝達が一回切れる。
しばらくして、

《大賢者ができるってさ》

《やっぱり大賢者ってすごいね》

となれば話は早い。

少しリムルさんと話し合って、それから、

「事情は分かった。それじゃいつちよこいつで剣を作ってみないか」

リムルさんはそう言いつつ胃袋から鉱石の結晶を取り出していた。

それに当然驚くカイジンさん達。

そりやそうだよね。

事情も何も知らなければいきなり高純度の鉱石が出現したわけだから。

それより、ちょうどいいから、

——スキル『解析』、発動。

僕はリムルさんが出した鉱石を解析した。

そして、仙術を使いために創造してみた。

すると思っただ通りに、僕の手のひらにはリムルさんが出した拳大の鉱石と同じものが
出上来がっていた。

「カイジンさん。これも使ってみてください」

「おいおい……。旦那といい嬢ちゃんといい、そんなにポンポンと出せるもんなのか
……？」

当然、カイジンさんはさらに驚いていた。

僕自身も内心驚いていた。

複製どころか本物と同等のものまで作れちゃうなんて思いもしなかったからだ。

まあ、それからなんやかんやあつて一晩かけて出来たロングソードは翌日にはリムルさんが捕食して見事に20本作り上げていたので、無事問題は解決したのであった。

ただ……。

《なあイズク……？　もしかして仙術を使って俺が出したのと同等のものを創造したのか？》

《うん。解析してやってみたらできちゃった……》

《できちゃったって……やっぱリチートスキルだな……》

《返す言葉がありません……》

リムルさんに相当呆れられてたのは言うまでもなかったです。

ちなみに、リムルさんはロングソード20本作る代わりにカイジンさんを技術顧問に誘っていた。

うまくいけばいいね。

NO. 015 エルフ達と思わぬ出会い

イズクとリムルの二人はロングソードを作ってくれたお礼にカイジン等に夜のお店に招待されていた。

ちなみにゴブタは一人お留守番をされていたので悔しそうな顔をしていたのをイズクは少しの罪悪感を感じていたり。

場所は『夜の蝶』というエルフ達が働いているというお店らしい。

それを聞いてイズクはふと思った。

まだ男性であるリムルは分かるがもう生前の生涯を女として過ごしてきた自分は場違いではないのかという疑問。

そんな感じの事をリムルに相談してみたが、

「まあ、大丈夫じゃね？ 薄っすらとでも男の時だった意識が少しでも残っていれば楽しめるだろ」

「そんなものかなー……僕、一応これでも子供を産んだこともあるんだよ?」

「マジ うえ!?それってやっぱ相手は男だったのか!？」

「う、うん……」

「それって精神的BL体験……いや、でも……それってどうなんだろう……?」

それでリムルはぶつぶつと悶々とした事を考えていたが、イズクは生前に言われ慣れた内容だったのですぐに受け流していた。

そんなリムルをよそにお店に到着したのか先を歩いていたカイジンが先導して、「それじゃリムルの旦那にイズクの嬢ちゃん、せめてものお礼として楽しんでいってくれ」

お店の扉を開く。

すると中から色とりどりの響きがいい女性の声で「いらつしやいませー!!」と案内された。

すここにはおとぎ話で有名なエルフ達の姿があり、リムルもさつきまでの悶々とした感情もすぐに放棄したのか気分よく案内されていた。

「うわー! カワイイ!!」

「私が先よう!!」

と速攻で、リムルはエルフの人達にあれよあれよという間に代わり代わりに持たれて

お互いに感触を楽しんでいた。

もう、リムルの脳内はお花畑が咲いている事だろうなと遠巻きに見ていたイズクは思っていた。

「あれ？ 獣人のお嬢ちゃんはままだもしかして未成年？ それじゃジュースを用意するね！」

少し丸い顔をした茶色い髪のパブカットのエルフの子がイズクを接待してくれていて、イズク本人は生前を含めれば三桁はくだらない年齢だが、まだこの世界に生れ落ちてから一年も経過していないために未成年には変わらないのだからおとなしくジュースを預かる事になった。

それとイズクはふと思った。

他のエルフの子はリムルに夢中なのに、このエルフの人はどうして自分に良くしてくれるのだろうか……。

リムルとカイジンがなにやら大人の会話をしだしそうになっているのをよそに、イズクはジュースを飲みながらも、

「あの、お姉さんはあつちはいいんですか？」

「え？ うん。私はなんかどうしてかあなたの方がつい気になっちゃって、ね」

それで少し悩んでいるような顔をするエルフの子。

イズクはそれで「そっか」と相槌を打っていた。

「まあ、こんなお店に女の子、しかも子供が来ることの方が珍しいしね。でも、この人……どこか雰囲気というかなんか懐かしい感じがするんだよね。なんでだろう……？」

イズクはそれで少し考え込んでしまっていた。

ん？ 俺がエルフの子達と戯れている間に、なんかイズクが大人しくなっている。

いや、あれはなにかを考え込んでいる感じか？

一緒にいるエルフの事なにかあったんかな？

思念通話を使って悩みを聞いてみるのもいいんだけど、そう何度も多用してもイズクに対して失礼だしな。

俺は空気が読めるスライムなのだ。

「ねえ、スライムさん。ちよつといい?」

「ん?」

「よかつたらだけど、これやってみない?」

これって? なにか水晶玉を持つてるけど。

はっ!? もしや水晶玉を使ったエロイ妙技をするのか!?

「わたし、得意なんだ。占い」

なあんだ。占いか。

あ。でも、この魔法が存在する世界での占いなんて舐めてかかったら変な結果が出ても信じてしまいそうだぞ。

慎重に対応してもらおう。

「そっちのお嬢ちゃんもよかつたら占ってあげるね」

「あ、ありがとうございます」

それでなにやら悩んでいたイズクも反応したのか振り向いてきた。

「占い、ですか?」

「そ。うーん……やるとしたら運命の人とかどうか?」

「面白そうですね!」

お！ どうやらイズクも乗り気のようにだな。
なら、

「それじゃまずはイズクが占ってもらえよ」

「え？ いいの？」

「ああ。俺が占ってもらってももしかしたら同族のスライムかもしれないし……」
と、お茶かけてみるが、マジでスライムだったらマジで笑えないな。

「それじゃ、まずはイズクちゃんでもいいのよね？ いいかしら？」

「はい！」

「それじゃ占うわね」

お姉さんがそれで占いを始めると水晶玉は光って次第に一人の女性の姿が映し出されてくる。

その人はどうやら耳が長い事からエルフのようで、って……あれ？

なんかイズクの隣に座ってるエルフさんに見えない？

「わ、私……？」

「お嬢ちゃんの運命の人はあなたなの？ ムウララ？」

「ウララ……？」

どうやらエルフのお姉さんの名前はウララというらしい。

そう思えばどこか常に麗らかな雰囲気を感じるというか……。

だけでそれでイズクの表情は一変していた。

なんだ？ なにかあったのか？

「あ、あの……もしかしてあなたは……麗日さん？」

「ウララカ……？ それって……ウツ？」

するとウララさんは急に眩暈でも起きたかのように額を抑えだしていた。

おいおい……？ まさかもしかしてイズクという麗日という人の転生体の人だった

りするのか？

しかも今現在失っている前世の記憶を思い出しているとかそんな感じ……。

「ごめんね……なんか調子が悪くなったみたい。ママ、ちょっと下がります」

「わかったわ。ごめんね皆さん」

ママさんがウララさんを連れて行ったけど、これは一波乱ありそうだな……。

それで占いの得意なお姉さんが少し焦った表情で、

「な、なんか微妙な空気になっちゃったけど、スライムさん。続ける……？」

「あ？ そうだなあ……それじゃお願いしちゃうかな」

先ほどの件で少し黙り込んでしまっているイズクの方を見ながらも、占いをやっても

らった。

僕の勘違い、にしては出来すぎている展開だけど、さっきの占いに、そしてウララさん。
ん。

僕が懐かしい気持ちを感じた嘘偽りのない気持ち。

きつとウララさんは……。

でも、僕の事は覚えていないみたいだしやっぱり核心には至らない。

僕は今後、ウララさんとどんな顔をして接すればいいか分からない。

期待しすぎても後が残念な事になっても分からないし。

どうしよう……。

【大丈夫だよイズク】

そんな不安な気持ちの時に僕の事を理解してくれる人がいる。

やっぱりフオウは優しいね……。

「もし彼女が本当にあの麗日さんの転生した姿でたとえ前世の記憶を持っていなかったとしても、私はいつまでもイズクと一緒にだからね。私の独占欲が満たせるならそれでもいい。」

でも、もし記憶を思い出したら優しく迎えてあげようね」

『そうだね。ありがとう、フオウ』

【うん♪】

少しだけでも気持ちと和らいだところで、僕は意識を浮上させてリムルさんの方の運命の人の映像を見る。

そこには一人のどこか日本人のような顔つきの女性に五人の少年少女達。

子供たちの何人かは女性に向かって泣いているみたいでどこか寂しそう……。

これがリムルさんの運命の人……？

そこでカイジンさんが女性に見覚えでもあるのか、

「その人はもしかして『爆炎の支配者』で有名な『シズエ・イザワ』じゃねえか？」

その、どこかやっぱり日本人のような名前で、どうにも話によると自由組合というギルドの英雄だという。

なんでも若い見た目に反して何十年も生きているとか。

もしかしてこの世界の年齢の概念はもとの世界と違うのかな……？

いや、もしかして生前の僕と同じでなにか歳を取らない秘訣とか裏技があったり……？

【ありえなくもないよねー。なんせ魔王とか勇者とかもいる世界だし】
『だよ。とにかくこれがリムルさんの運命の人か！』

どこか感慨に耽っていた時であった。

突然、店の入り口付近から怒声が響いてくる。

「なんだ、女主人！ この店は魔物の連れ込みを許すのか!？」

なんか、どこか物騒な物言い。

一波乱ありそうでこの先が少し不安になった感じだよ……。

「リムルは巻き込まれ体質でも持っているのかな？ イズクも合わせて相乗みたいな？」

『僕も……って生前を考えれば否定しきれない自分が悲しい……』

とにかくその後僕達はちよつと騒動があつてこの国のお偉いさんと顔合わせする事になる。

どうにかみんなのもとへと帰りたいものだね。